

Zoo and Wildlife News

No.54 2022.6



© Kazunari SUDO / Eagle's Office Inc. 2022

ズー・アンド・ワイルドライフニュース No.54

Contents

第 15 回アジア保全医学会開催案内	1
第 28 回日本野生動物医学会のご案内 (第 1 報)	2
認定専門医協会から	3
各種委員会から	5
学生部会から	6
動物園・水族館から	11
リレー連載	14
現場レポート	19
ワンヘルスコーナー	23
書籍紹介	30



JAPANESE SOCIETY OF
日本野生動物医学会
ZOO AND WILDLIFE MEDICINE

日本野生動物医学会

Japanese Society of Zoo and Wildlife Medicine

目 的

1. 野生動物および動物園動物に関する動物医学研究の学術交流と発展
2. 野生動物医学の卒前・卒後教育
3. 傷病野生動物診療に関わる臨床および救護技術の交流と発展
4. 野生動物の正しい知識と理解のための一般市民への普及啓発
5. 野生動物医学および野生動物保護に関する国際交流と推進

役 員

会長	大沼 学	((国研)国立環境研究所)[統括]	評議員	大池辰也	(南知多ビーチランド)
副会長	高見一利	(豊橋総合動植物公園)[統括補佐]		大野晃治	(男鹿水族館GAO)
副会長	田島木綿子	(国立科学博物館)[統括補佐]		岡本 実	(酪農学園大学)
顧問	坪田敏男	(北海道大学)[アドバイザー]		落合謙爾	(岩手大学)
	羽山伸一	(日本獣医生命科学大学)[アドバイザー]		川上茂久	(群馬サファリワールド(株))
	岸本真弓	((株)野生動物保護管理事務所関西分室)[アドバイザー]		木戸伸英	(横浜市立金沢動物園)
	須藤明子	((株)イーグレット・オフィス)[アドバイザー]		木村順平	(ソウル国立大学)
事務局長	柳川洋二郎	(北海道大学)[庶務]		鯉江 洋	(日本大学)
理事	和田新平	(日本獣医生命科学大学)[専門医協会]		後藤拓弥	((株)野生動物保護管理事務所)
	齊藤慶輔	(猛禽類医学研究所)[広報]		鳥本 樹	(日本獣医生命科学大学)
	浅野 玄	(岐阜大学)[経理・基金担当(基金担当)]		下鶴倫人	(北海道大学)
	佐々木基樹	(帯広畜産大学)[学術・教育]		進藤順治	(北里大学)
	楠田哲士	(岐阜大学)[学会誌編集]		進藤英朗	(下関市立しものせき水族館「海響館」)
	外平友佳理	(SALU)[ニュースレター編集]		鈴木正嗣	(岐阜大学)
	佐藤雪太	(日本大学)[感染症対策]		竹田正人	(宮崎市フェニックス自然動物園)
	岩尾 一	(新潟市水族館)[臨床・普及啓発]		竹鼻一也	((有)市原ぞうの国)
	長嶺 隆	(NPO法人どうぶつたちの病院沖縄)[野生動物保全・福祉]		田中悠介	(仙台うみの杜水族館)
	木下こづえ	(京都大学野生動物研究センター)[国際交流・アジア保全医学会]		チェンバーズ ジェームズ	(東京大学)
幹事	石井千尋	(猛禽類医学研究所)[庶務、経理・基金担当(経理担当)]		寺沢文男	(新江ノ島水族館)
	植田美弥	(横浜市立金沢動物園)[専門医協会]		中川真梨子	(群馬サファリワールド(株))
	近藤圭佑	((株)海の中道海洋生態科学館)[広報]		中津 賞	(中津動物病院)
	川瀬啓祐	(日立市かみね動物園)[学術・教育]		根上悦雄	((公社)日本動物園水族館協会)
	加藤卓也	(日本獣医生命科学大学)[学会誌編集]		根上泰子	(環境省)
	井上春奈	(わんぱーくこうちアニマルランド)[ニュースレター編集]		伴 和幸	(豊橋総合動植物公園)
	野田亜矢子	(広島市安佐動物公園)[感染症対策]		藤井 啓	(OATアグリオ(株))
	水主川剛賢	(神戸どうぶつ王国(クウ動物病院))[臨床・普及啓発]		松岡由子	(滋賀県立琵琶湖博物館)
	渡邊有希子	(猛禽類医学研究所)[野生動物保全・福祉]		松林 誠	(大阪府立大学)
	藤原摩耶子	(京都大学野生動物研究センター)[国際交流・アジア保全医学会]		松本令以	(兵庫県立コウノトリの郷公園)
監事	石塚真由美	(北海道大学)[監査]		皆川智子	((一財)沖縄美ら島財団)
	山口剛士	(鳥取大学)[監査]		宮下 実	(宇部市ときわ動物園)
評議員	赤木智香子	(ラプター・フォレスト)		向井 猛	(札幌市保健所動物管理センター)
	浅川満彦	(酪農学園大学)		村田浩一	(日本大学)
	石名坂 豪	((公財)知床財団)		森田菜摘	(横浜市立よこはま動物園ズーラシア)
	伊藤圭子	(ゆいの鳥どうぶつ病院)		森光由樹	(兵庫県立大学)
	伊東隆臣	(海遊館)		柳澤牧央	((株)マリンパレス水族館うみたまご)
	伊藤英之	(京都市動物園)		山上達彦	(長野市茶臼山動物園)
	岩田恵里	(岡山理科大学)		米田久美子	((一財)自然環境研究センター)
	宇根有美	(岡山理科大学)		綿貫宏史朗	(京都大学野生動物研究センター)
	遠藤秀紀	(東京大学総合研究博物館)			

会 員

本会会員は正会員、学生会員、団体会員および賛助会員とする。入会を希望するものは所定の入会申込書に所要事項を記入し、会費を添えて本会事務局に申し込む。会費は以下のとおりである。

正会員：	9,000 円
学生会員：	3,000 円
団体会員：	70,000 円
賛助会員：	一口 30,000 円

COVER PHOTO

ホンドキツネ (*Vulpes vulpes japonica*)

撮影：須藤一成 (株)イーグレット・オフィス

本会会員の権利は以下の通りである。

1. 本会発行の学術定期刊行物の受領
2. 本会発行の刊行物への投稿
3. 本会主催の集会への出席と研究発表
4. 総会への出席および本会の運営への参加
5. 本会役員の見学権と被選挙権。ただし、この権利は正会員に限られる。

事務局：北海道大学大学院獣医学研究院

臨床獣医学分野 繁殖学教室内

Tel・Fax 011-706-5234

E-mail wildmed@vetmed.hokudai.ac.jp



第15回アジア保全医学会大会開催案内

国際交流アジア保全医学会委員会 木戸伸英（公益財団法人横浜市緑の協会金沢動物園）

新型コロナウイルス感染症の脅威がいつまで続くのか見通せない状況が続いております。国際学会の開催も以前と同様に多くの方々が集まって実施するのが難しいのが実情で、昨年の日本野生動物医学会大会・アジア保全医学会大会の合同開催（札幌）も、現地参加とオンラインでの参加というハイブリッド形式で行われました。

さて、今年のアジア保全医学会大会ですが、タイのチェンマイで行われます。実際に私たちが現地に赴くことは難しいかと思いますが、大会自体は前回と同様にハイブリット形式での開催で、概要は以下です。

日程：2022年10月25日～28日

キーノートスピーカー

- Nantarika Chansue 先生（Chulalongkorn University, Thailand）
「野生動物保護への世界的影響～回復のために私たちは何ができるのか？～」

全体セッション・スピーカー

- Lisa Yon 先生（University of Nottingham, UK）
「野生動物保全プログラムにおける福祉と倫理：One healthのためのOne welfare」
- Friederike Pohli 先生
（University of Veterinary Medicine, Vienna, Austria）
「野生動物保全プログラムにおける福祉と倫理：One healthのためのOne welfare」
- Jonathan Sleeman 先生（National Wildlife Health Center, USA）
「21世紀の野生動物の健康：変革の必要性」
- Parntep Ratanakorn 先生
（Chulabhorn Royal Academy, Thailand）
「野生動物の健康」
- Janine L. Brown 先生（Center for Species Survival, USA）
「野生動物繁殖管理戦略」
- Ampika Thongphakdee 先生
（Zoological Park Organization, Thailand）
「野生動物繁殖管理戦略」

- Vijitha Perera 先生
（Sri Lanka Department of Wildlife Conservation, Sri Lanka）
「人と野生動物の境界線」
- Pornchai Sanyathitiseree 先生（Kasetsart University, Thailand）
「人と野生動物の境界線」
- Sivasothi N 先生（National University of Singapore, Singapore）
「人と野生動物の境界線」
- 下鶴倫人先生（北海道大学）
「人と野生動物の境界線」

学会参加費（現地参加もオンライン参加も同額予定）

早割り料金（4月1日～8月15日までの申し込み）

一般 4,500 バーツ

学生 3,000 バーツ

通常料金（8月16日以降の申し込み）

一般 5,500 バーツ

学生 4,000 バーツ

（2022年3月18日の両替レート：1,000円⇔279.92バーツ）

アジア保全医学会の特徴は、アジアを中心に欧米の方々など多様な国や地域の方々の参加があり、多種多様な学問領域を専門にされている方々が集まる場であることです。アジア保全医学会はそのような学問的な多様性の中から新しいアイデアや知識の創造を育む場になるのではないかと考えます。そういった、ある種カオスのような、混とんとした場に身を委ねてみるのも、学問の楽しみの一つではないでしょうか。

最新の情報は以下のURLをチェックしてください。

アジア保全医学会チェンマイ大会のURL：

<https://ascm2022.vet.cmu.ac.th/>

以上、みなさまのご参加お待ちしております。

第28回日本野生動物医学学会大会のご案内（第1報）

第28回日本野生動物医学学会大会を以下の要領で開催いたします。皆様のご参加を心からお待ち申し上げます。

- 会議名称：第28回日本野生動物医学学会大会
- 会期：2022年9月22日（木）午後～9月24日（土）
- 会場：つくば国際会議場
〒305-0032 茨城県つくば市竹園2丁目20-3
- 大会長：田島木綿子（国立科学博物館 動物研究部）
- 事務局長：田島木綿子（国立科学博物館 動物研究部）
- 連絡先：第28回日本野生動物医学学会大会事務局
〒305-0005 茨城県つくば市天久保4-1-1
国立科学博物館 動物研究部 田島木綿子
TEL: 029-853-8413（研究室直通）
E-mail: n.zoo.wildl.med28@gmail.com

<大会日程>

9月22日（木） 各種委員会、理事会、評議委員会（科博筑波地区）

9月23日（金、祝）

午前 受付（ホワイエ）

口頭発表（大ホール）

自由集会・各種委員会シンポジウム（大会議室101）

ポスター発表（ホワイエ）

午後 口頭発表（大ホール）

自由集会・学生集会（大会議室101）

ポスター発表（ホワイエ）

9月24日（土）

午前 受付（ホワイエ）

口頭発表（大ホール）

自由集会・各種委員会シンポジウム（大会議室101）

ポスター発表（ホワイエ）

総会、発表授賞式（大ホール）

午後 公開市民講演会（大ホール、参加自由、無料）

- 演題登録締切：2022年8月8日（月）
- 参加登録締切：事前登録2022年8月22日（月）
- 参加費振込：事前登録2022年8月22日（月）振込を確認後、参加登録完了とする。

今回は銀行振り込みのみ。Webからのカード決済等なし。

8月23日以降は、当日登録として会場で参加費を現金でお支払い下さい。

■ 参加費振込先：

三井住友銀行 0009

支店名 つくば支店 244

口座番号 0513939

口座名 第28回日本野生動物医学学会大会事務局

ダイニジュウハチカイニホンヤセイドウブツイガツカ
イタイカイジムキョク

- ・ 全ての登録や諸手続きは大会ホームページをご参照ください。大会ホームページは絶賛作成中、公開時はMLで告知します。
- ・ 研究発表登録：大会ホームページにて受付
※期間4月中～8月8日（月）（予定）
- ・ 各種委員会シンポジウム：大会ホームページにて受付
※期間4月中～8月8日（月）（予定）
- ・ 自由集会申込：大会ホームページにて受付
※期間4月中～8月8日（月）（予定）
本学会の学会員（学生会員を含む）のみ。応募多数の場合は先着順といたします。
- ・ COVID19の影響により、情報交換会は実施せずならびに会場におけるお茶ブースは廃止とする。



認定専門医協会から

2022 年度日本野生動物医学会認定専門医試験の実施について

日本野生動物医学会認定専門医協会 和田新平

2022 年度日本野生動物医学会認定専門医試験を下記の 4 段階で実施します。

①書類審査

提出された書類を元に協会が厳密な書類審査を行います。その結果、受験資格を満たしていないと判断した場合は、その具体的な理由を記載した審査結果を、提出書類とともに返却します。

②動物園動物医学，水族医学，野生動物医学，野生動物病理学・感染症学，鳥類医学，各分野からそれぞれ 8 問ずつ計 40 問の 5 択あるいは穴埋め形式試験（一次試験）。

③希望する専門分野に関する筆記試験（二次試験・筆記）。

④希望する専門分野に関する実地面接試験（二次試験・実地面接試験）

※一次試験および二次筆記試験は対面にて実施するが，二次実地面接試験はリモートでの実施の選択も可能です。必要書類提出時にメールにて和田ないし浅川までご連絡下さい（メールアドレスは本稿末参照）。

受験希望は受験要項を参照し受験準備を実施してください。なお，受験要項，試験用参考書一覧，受験申込用紙は以下で参照およびダウンロード可能です（2020 年 12 月 30 日にアップされた資料をご参照下さい）。

<https://sites.google.com/a/jczwm.com/information/>

別表 1 評点基準

項目	点数	備考
野生動物医学会会員歴	3 年以上 20 点	3 年は必須
野生動物・動物園 経年歴* ¹	5 年以上 30 点	5 年は必須
野生動物医学関連論文，その他* ²	筆頭 10 点 / 報 共著 5 点 / 報 (総計 60 点まで)	2 報は必須，内 1 報は野生動物医学会誌
日本野生動物医学会発表	筆頭 10 点 / 回 共同 5 点 / 回 (総計 40 点まで)	2 回は必須（共同も含む） 同等のワークショップ等も含む
野生動物医学に関連した社会貢献* ³	総計 20 点まで	
博士号	20 点	野生動物医学関連のテーマ
	総計 100 点以上	

*¹ 経年歴は獣医師免許取得後の当該職域における経年歴とする。大学学部生時代およびそれ以前の経験についてはこれに含めない。

*^{2, 3} 内容判定は運営委員会（試験委員会）で判断する。

2022 年度日本野生動物医学会認定専門医試験受験要項

1. 受験資格者：

1) 下記の日本野生動物医学会認定専門医試験受験資格規定に合致する者。

日本野生動物医学会認定専門医試験受験資格規定

- a. 日本国内の獣医師資格を有し，獣医師としての十分な道徳観と倫理観をもつ者であること。
- b. 出願時に 3 年（36 ヶ月）以上継続して日本野生動物医学会会員であること。
- c. 野生動物医学に関連した専門的研究または職業に従事した年数が総計で 5 年（60 ヶ月）以上であること。
- d. 筆頭著者論文 2 報以上（内 1 報は野生動物医学会誌）であること。
- e. 別表 1 の評点基準による合計点が 100 点以上であること。
- f. 学会活動，研修会参加，論文発表などを行っていること。

2. 提出書類：

下記書類を日本野生動物医学会認定専門医事務局宛てに郵送して下さい。

- 1) 所定の受験申込フォームに必要事項を記載したもの。
- 2) 自身の関わった主要な学術論文の発表年，題名，著者名（複数の場合は申請者に下線を付す），発表誌名を取りまとめた一覧表（書式自由）を 2 部，および各学術論文の表紙および要

旨をコピーしたもの各2部。

- 3) 自身の関わった主要な学会発表の発表年、題名、著者名（複数の場合は申請者に下線を付す）、発表学会名を取りまとめた一覧表（書式自由）を2部、および各講演要旨をコピーしたもの各2部。
- 4) 野生動物医学に関連した社会貢献についての自己アピール（1,000字程度）2部。
例：野生動物医学分野に関連した一般向けの活動（講演、執筆、救護ボランティアなど）、SSCやショートコースなどの参加、海外の野生動物医学に関する資格の取得等
- 5) 学位を取得した者はその学位論文の和文要旨のコピー2部。
- 6) 4cm×5cm大の顔写真（裏面に氏名記載）を2葉。

書類郵送先：

〒180-8602
東京都武蔵野市境南町1-7-1
日本獣医生命科学大学 水族医学研究室 和田新平

3. 締め切り：

2022年7月31日

4. 受験票送付：

2022年8月中旬に書類審査に合格した受験者に送付する。

5. 受験料：

10,000円（上記の書類審査に合格した者のみ下記銀行口座に払い込む）。払込の締め切りは2022年9月30日。

払込先銀行口座

銀行：北洋銀行

支店名：北七条支店

口座No：3871623

口座名：日本野生動物医学会認定専門医事務局

事務局代表 坪田敏男

6. 認定試験日程：

2022年10月～11月を予定（受験希望者の要望を考慮します）

7. 試験用参考書について

参考書一覧は

<https://sites.google.com/a/jczwm.com/information/>

よりダウンロード可能です→2020年12月30日にアップされた資料をご参照下さい。

8. その他：

試験に関して何らかの変更がある場合は、学会ホームページとメーリングリストで順次公表します。また、試験に関する質問は、氏名・所属を明記の上、下記アドレスまでe-mailにてお問い合わせください。

【質問の送付先】

和田新平 swada@nvl.ac.jp

浅川満彦 askam@rakuno.ac.jp

（件名に「野生動物認定専門医について」と付記）

(旧)SSC からのお知らせ

(旧) SSC 委員会 松本令以 (兵庫県立コウノトリの郷公園)

SSC 委員会は、2021 年度をもって廃止され、これまで行ってきた学生向けプログラムは終了することになりました。次年度からは「学術・教育委員会」よって新たに「卒前卒後教育プログラム」が実施されることになりましたのでお知らせいたします。

SSC (スチューデントセミナーコース。2003～2007 年度はサマーショートコースと呼称) は、2003 年度から行われてきた有料の実習プログラムで、計画段階では、「獣医師のための卒後教育および専門医認定試験受験資格の一つ」としても想定されました。しかし大学間における野生動物学および野生動物医学教育の不均一さを補う必要性が考慮され、「学生のための卒前教育」として実施されてきました。

これまでに、

- ・基礎 (I) 座学コース
(開催場所：国内各地、開催年度：2003～2008, 2014～2021)
- ・基礎 (II) フィールド実技コース
(開催場所：酪農学園大学、開催年度：2004～2021)
- ・応用 (I) 動物園水族館コース
(開催場所：横浜市立動物園、開催年度：2004～2018)

- ・応用 (II) ワイルドライフリハビリテーションコース
(開催場所：ウトナイ湖野生鳥獣保護センター、開催年度 2005)
(開催場所：岐阜大学、開催年度：2006～2011)

・応用 (III) 博物館コース
(開催場所：国立科学博物館、開催年度：2008～2021)
の 5 種類のコースが設定され、コースごとに特色あるプログラムが行われてきました。2003 年度から 2021 年度までの 19 年間に、60 回以上のコースが企画され、のべ 600 名以上の方に受講していただくことができました。

今後は、「学術・教育委員会」の傘下で、田島木綿子 (国立科学博物館) 副会長を世話人として、「卒前卒後教育プログラム」として実施されることとなります。その実施内容はフィールド実践編を主体とするもので、詳細や実施形式については、実施機関の担当者から随時メールリストやニュースレターで告知される予定です。また、専門医養成プログラムが「日本野生動物医学協会認定専門医協会」によって実施される予定です。

最後に、これまで SSC の実施にあたってご協力を頂いた学会員の皆様およびその所属機関の皆様、ならびに SSC の講師を務めて頂いた先生方にこの場を借りてお礼申し上げます。



学生会から

代表挨拶

高橋 航（麻布大学獣医学部獣医学科5年）

日本野生動物医学会会員の皆様、お世話になっております。学生会代表の高橋 航です。

所属することに意味を見いだせる学生団体にしたいと表明してから始動しましたが、早いもので任期まで残り数か月となりました。コロナ禍で何ができるか、学生会とは何のために存在する

のかを追求して、有志によるパネルディスカッションの開催や学生会規約を含む構造の改革を行って参りました。

しかしながら、これらの活動にどんな意味があったのか私自身が理解できていません。学生会が出不精と言われて久しいですが、今後の学生会は、オンラインでの活動しか知らない下級生が中心となるため、「野生動物好きが集まる交流団体」と化すことを懸念しています。交流そのものを否定するつもりはありません。しかし、学生が自ら改めない限り、学会の名を冠しただけの

日本野生動物医学会学生会 役員及び支部長名簿 令和4年6月時点
(新しく就任した方の名前に★を付けました)

学生会代表	: 高橋 航	(麻布大学獣医学部獣医学科5年)
副代表	: 伊藤萌林	(北海道大学共同獣医学課程5年)
事務局長	: 岩元千紘	(鳥取大学農学部共同獣医学科4年)
会計	: 畠山 翔	(酪農学園大学獣医学群獣医学類5年)
北海道大学	: 藤田祥帆	(獣医学部共同獣医学課程4年)
酪農学園大学	: 北條裕人	(獣医学群獣医学類4年)
帯広畜産大学	: 丸山青葉	(畜産学部共同獣医学課程4年)
北里大学	: 早川佑奈	(獣医学部動物資源科学科3年)
岩手大学	: 菅原千尋	(農学部動物科学科3年)
日本獣医生命科学大学	: 大山萌恵	(獣医学部獣医学科4年)
	: 高橋菜摘	(獣医学部獣医保健看護学科4年)
東京農工大学	: 石井二千夏	(農学部地域生態システム学科3年)
	: 川嶋夏月	(農学部地域生態システム学科4年)
東京大学	: ラーリック 寿里晏	(農学部獣医学課程獣医学専修6年)
麻布大学	: 原川歩美	(獣医学研究科動物応用科学専攻修士1年)
日本大学	: 根井 大	(生物資源科学部獣医学科4年)
	: 諸隈光香	(生物資源科学部獣医学科4年)
帝京科学大学	: 濱田花音	(生命環境学部アニマルサイエンス学科4年)
	: 桐山優美	(生命環境学部アニマルサイエンス学科4年)
岐阜大学	: ★川嶋梨湖	(応用生物科学部共同獣医学科4年)
	: ★翼 洋希	(応用生物科学部共同獣医学科4年)
大阪府立大学	: 小川美朱	(生命環境学域獣医学類6年)
岡山理科大学	: 新見日向	(獣医学部獣医学科4年)
	: 横田 遥	(理学部動物学科3年)
鳥取大学	: 岡村駿治	(農学部共同獣医学科4年)
	: 岩元千紘	(農学部共同獣医学科4年)
山口大学	: ★三木陽清	(共同獣医学部3年)
宮崎大学	: 筒井 静	(農学部獣医学科5年)
鹿児島大学	: 大須賀詩織	(共同獣医学部4年)

※なお、各支部長の紹介は、学生会のFacebook, <https://www.facebook.com/yasedo.gakusei/> をご覧下さい。

閉鎖的空間が延々と残り続けることになるでしょう。そういった意味で、自分の無力さを痛感しています。執行部として、1人の学生会員として、学生部会の本義を追求し続ける必要があると感じます。自戒の念も込め、残りの任期を全うしていく所存です。今後とも皆様のご支援とご愛顧のほどよろしくお願い申し上げます。

■ 学生部会公開パネルディスカッション：

“これからの希少種保全”

～域外保全・域内保全のバランスを考えよう～

伊藤萌林（北海道大学獣医学部共同獣医学課程 5年）

日本野生動物医学会の皆様、こんにちは。学生部会副代表の伊藤と申します。昨年12月にパネルディスカッションを開催しましたので、企画者を代表して報告をいたします。当日の様子などは学生部会のSNSでも発信していますのでそちらもご覧下さい (https://twitter.com/igakukai_bukai/status/1475382375479939075?s=21)。

学生部会にはしばしば、「外に出ない」「動物園の話が多い」などの声が寄せられることがあります。実際、フィールドに出て実際に自然に接しようという人が学生部会には少ないと思います。

また、救護や動物園など一部の分野への興味を持つ一方で、生物多様性といった広い視野を持って話をする学生が少なく感じます。今回の企画は、以上のような学生部会の状況を変えたいと思う学生部会有志4人によって企画されました。

タイトルには希少種を掲げていますが、副題の方が重要です。「域外保全・域内保全のバランスを考えよう」。域外保全は域内保全の補完であるという考え方が主流ですが、学生部会の多くの方は域外保全により興味を持っているように感じます。そこで、もう一度2つのアプローチを見直して、そのバランスを考えるこ

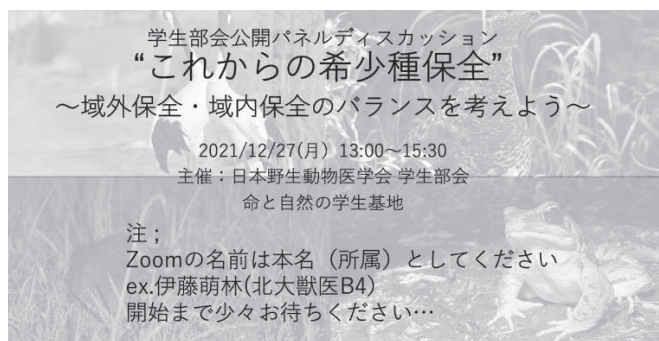




図1 タイトルファイル


パネリスト




高橋航
麻布大学獣医学部獣医学科4年
学生部会21期代表
あまりフィールドに行かないし、勉強もしない怠惰な学生。ただ、会いたいと思った生き物はほとんど会える謎の力を持つ。北海道出身。赤道は3回超えた。寒いのは嫌い。



鈴木なお
北海道大学獣医学部 4年
学生団体「命と自然の学生基地」代表
動物園を拠点とした環境教育に強い興味を持つ。「命と自然の学生基地」の代表を務め、動物園獣医師と学生の交流会や、動物園をフィールドにした研究活動などを展開。大の釣り好き。



大杉祐生
酪農学園大学獣医学部4年医動物学ユニット
学生部会19期事務局長/20期酪農大支部長
鳥と寄生虫が見たい獣医学生。
鳥を中心に北海道のフィールドを始め、奄美、ボルネオなども。研究室では寄生虫、野生動物医学、法獣医学を中心に今日もうんこ汁(サンプル)と戦う。



伊藤萌林
北海道大学獣医学部4年野生動物学教室
学生部会21期副代表
外来種対策を中心とする生態系保全を志し獣医学部へ。両・哺乳・爬虫・鳥を中心に年間100日フィールドに通う。アライグマによる両生類への影響や感染症を勉強中。生物分類技能検定2級(動物)

図2 パネリスト及び主催者

とで学生としての活動につなげようというのが今回の議題の趣旨です。

参加者は決して多くはありませんでしたが、学生部会のみならず、外部の大学生や高校生の参加もありました。企画の甘さで議論に妥協があった所は今後の反省点となりましたが、全体として非常に盛り上がったことは嬉しく思います。ディスカッションでは参加者からも多くの意見をいただきました。パネリストからは、「域外保全を含め、野生動物に関わろうと思う学生はなんでもよいのでフィールドに出た方がよい」という意見が複数見られました。一方で、進めるうちに動物園の話ばかりになってしまうなど、学生部会のよくない傾向も見られました。

最後にはゲストとしてお招きしていた畠本先生（日本獣医生命科学大学）から全体を通してのコメントをいただきました。学生の拙い勉強会にお付き合いいただいた畠本先生にこの場を借りて感謝申し上げます。

コロナ禍の影響で学生部会の活動は転換を求められているように感じます。一方で、オンラインツールの発達により今までできなかった全国区での交流が可能となり、例えば他支部の勉強会に気軽にアクセスできるようになっています。今回の企画にはそんな背景もありました。この機を逃さず、学生部会からどんどんオンライン企画を打ち出して、地域を越えた学生同士の活動が盛り上がってほしいと願っています。

■ 実習報告：奄美いんまや動物病院

大杉祐生（酪農学園大学獣医学群獣医学類 6年）

私は昨年夏、奄美でノネコ問題と野生動物救護などに尽力されている伊藤圭子先生（いんまや動物病院）のもとで実習をいたしました。

私は大学2年生の春に鳥類調査で初めて奄美を訪れ、島の生態系・固有性に魅了されました。その時の夜間探索でノネコに遭遇したこと、2019年の学生部会入門セミナーで伊藤先生のお話をお聞きしたことも相まって、今回の実習を申し込みました。来島前のPCR検査とワクチン接種など十分な感染対策のもと受け入れていただきました。実習は7日間で、内容は動物病院での犬猫や傷病鳥の診療見学、また夜には伊藤先生に林道を案内していただくなど大変濃い7日間でした。そこで感じたことを以下に書き記します。

①現場で必要とされるために

実習の中で「離島の獣医療の特殊性」を大いに感じました。

「ペットは家族」という考えの昨今ではありますが、島においては「ペットはペット」という認識は少なくないように思いました。もちろん、それが悪いわけではなく、そういった地域ごとの動物観はノネコ問題を解決する上で重要だと感じました。

また伊藤先生と市民の方を始め環境省、行政の方との距離の近さや信頼関係も感じとることができました。頭ごなしに適正飼育や生態系保全をのたまうのではなく、まずは自分にできることを何でも徹底的にやる先生に敬服し、その姿勢が今の島民との関係に繋がっていると感じました。

②現場に行くことの重要性

今回、一番感じたのは机上の勉強と実際に見て感じることのギャップです。事前に管理計画や資料で勉強していると、奄美大島では市町村、環境省、市民団体が一体となり積極的にノネコ対策に取り組み、かなり進展していると想像していました。しかし、実際には外飼いをやめられない方やマイクロチップを装着していない方も少なくなく、管理計画と市民の意識の差がこの実習を通じて垣間見えました。

③フィールドに出ることの重要性

伊藤先生とお話する中で共感したのは、学生時代に日頃からフィールドに出ることの重要性です。私は1年次から学生部会に所属してきたのですが、フィールドに出る学生が少なく寂しさを感じます。強要するつもりはありませんが、分野に関係なく足元の自然を見る目、その変化に気付ける感覚やセンス・オブ・ワンダーを育むことは野生動物に関わる上で大切だと改めて感じました。

最後に、お世話になりました伊藤先生、看護師の小椋さま、実



図3 夜の林道で発見した猫

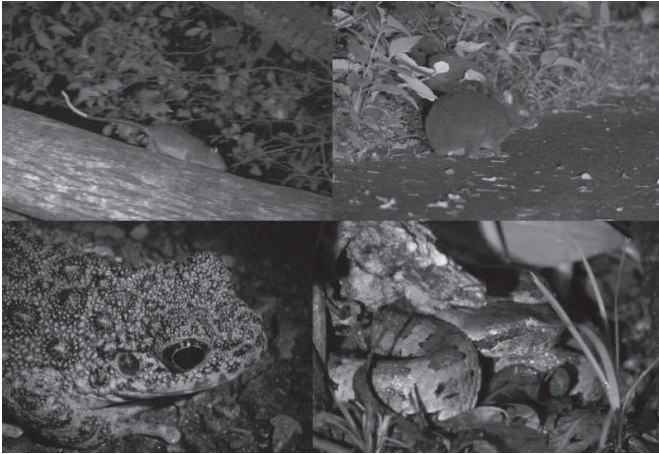


図4 伊藤先生に案内いただいた際に出会った生き物たち
 左上：ケナガネズミ 右上：アマミノクロウサギ
 左下：アマミシカワガエル 右下：ヒメハブ



図5 実習時間外を彩った奄美の鳥たち
 左上：ルリカケス 右上：オーストンオオアカゲラ
 左下：アマミヤマンギ 右下：オオトラツグミ

習時間外を彩ってくれた生き物たちにこの場をお借りし感謝申し上げます。実習について詳細が知りたいという学生さんがいましたら大杉の連絡先 (s21861131@stu.rakuno.ac.jp) までお気軽にご連絡ください。

■西日本交流会：動物の保護・管理について

松田優花（岐阜大学応用生物科学部共同獣医学科5年）
 こんにちは、岐阜大の松田と申します。2021年12月18日(土)に開催された日本野生動物医学会学生部会西日本交流会について報告いたします。

今回は講演会とディスカッションの2本立てで、コロナ禍ということもあり zoom を利用したオンラインでの開催となりました。

講演会では、絶滅が危惧されるヤンバルクイナやイリオモテヤマネコを含む野生動物やノネコ・ノラネコの保護管理を精力的に行われ、また NPO 法人 どうぶつたちの病院 沖縄にて理事長を務めていらっしゃる長嶺 隆先生にご講演をいただきました。先生のご講演を受け、獣医師として野生動物やその問題に関わるうえで、野生動物に対してすべきことだけでなく、その問題を解決するために必要な伴侶動物に対する関わり方についても考えを深めることができました。参加者からも、自分の住む地域でもノネコに関する対策を行いたい、情報を発信しアピールすることの大切さを感じたといった感想をいただきました。

講演会終了後に行ったディスカッションでは動物の保護・管理について特にノネコ・ノラネコに焦点を当て、自分たちの住む地域の現状や問題点、それらをよりよい方向へ向かわせるためにはどうすればよいのか・自分たちがすべきことは何かを、2つのグループに分かれて話し合いました。ディスカッションでは講演会の内容を受けて、活発な意見交換が行われ、さらに今後の活動に

日本野生動物医学会 学生部会

西日本交流会




講師：長嶺 隆先生
 テーマ：「動物の保護・管理について」
 日時：2021年12月18日(土)

14:00 注意事項など説明
 14:15 ご講演
 15:15 質疑応答
 15:45 ディスカッション(希望者)
 16:45 終了予定

講師紹介

「ヤンバルクイナたちを守る獣医師の会」やNPO法人「どうぶつたちの病院」を設立。
 ヤンバルクイナの保護・繁殖に力を注いでおられ、野猫への対策もなさっています。

参加費：無料
 定員：90名(先着順)
 申し込み方法：googleフォーム
 オンラインツール：zoom
 (いただいたメールアドレスにzoomの招待をお送りします)
 申し込み締切：12月17日(金)



図6 西日本交流会 告知資料

つながる提案もあり大変有意義な交流会となったと思います。

西日本は学生部会に所属する学生の数が比較的少なく、また大学同士も離れています。このためか、西日本では支部単位での活動や交流が活発に行われている大学が多いとは言えません。西日本交流会は、そのような状況下で新入生に生き物のこと・抱える問題などについてより興味をもってもらい、上級生は興味をより正確な知識・具体的な行動につなげる機会となり得るイベントです。来年度以降も西日本交流会が開催され、西日本の支部、ひい

ては学生部会全体の活動がより精力的なものとなるよう工夫できたらと思います。

昨年度実施に至らなかった西日本交流会を開催できましたこと、大変嬉しく思います。今回交流会を無事終了できましたことは、ご講演を快諾していただいた長嶺先生、企画から当日まで動いてくれた実行委員のみなさん、多くの参加者がいらしかったからこそ成し得たことです。この場をお借りして深く感謝申し上げます。

第 28 回大会に関するお知らせ

【学生部会企画】

■ 学生部会総会

期日・場所：大会期間中、ハイブリッド形式

概要：学生会員を対象に、学生部秋に関する方針や規約の取り決めを行う。また、22 期への引き継ぎを行います。

■ 学生集会

期日・場所：大会期間中、ハイブリッド形式

テーマ：未定

概要：講師の方を招いて野生動物を取り巻く問題を講義してもらい、討論を行う予定です。

■ 企画展示

テーマ：SDGs ウォッシュ、戦争や災害による野生動物への影響

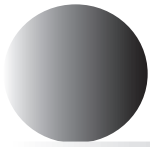
概要：テーマに沿ったポスターを製作し、展示を企画しています。

■ 企画販売

概要：学生部会オリジナルグッズを今年度も販売予定です。

令和 4 年 3 月時点で検討中の内容です。

大会情報の詳細に関しては、学生部会の Facebook, <https://www.facebook.com/yasedo.gakusei/> で随時お知らせします。



動物園・水族館から

動物園・水族館リレー連載

「私のココロにささった言葉」

橋本千尋（周南市徳山動物園）

山口県の周南市徳山動物園で獣医師として働き始めて、もうすぐ8年目になります。獣医師の仕事をメインとしていますが、その他 SNS での情報発信やマスコミ対応、動物取扱責任者や他園館との動物移動関係のやりとり等も行っており、毎日がとても充実しています。

私の生まれは宮崎県です。大自然の中で野山を駆け回り、体を動かしてばかりの子ども時代でした。そんな中、親からもらった大きなトラのぬいぐるみをきっかけに野生動物に興味を持ち、北海道の酪農学園大学へ進みました。野生動物の寄生虫を研究されている先生の下で学び、動物園やサファリパークで飼育されている大型ネコ科動物の寄生虫を調査していました。卒業後は、愛知県で大動物と小動物を診ている動物病院に勤め、臨床経験を積ませてもらい、現在に至ります。山口県は緑もゆかりもない土地で

したが、今では骨を埋める覚悟までできた好きな場所となっています。

さて、「私のココロにささった言葉」ですが、これまで私は周りの人たちにとても恵まれ、その時その時で大切な言葉をもらってきました。一つに絞り込むのはとても難しいことです。ですので、今の自分が一番ココロにささっている言葉についてお話しいたします。

私は「ハイキュー!!」というアニメにかなりハマっています。何十回見たか覚えていません。バレーを追求し、一つの目標に向かって突き進んでいくストーリーがたまらなく痺れるのです。その中で、今の私のココロにささった言葉は「できるまでやれば、できる」です。

現在、当園には治療中のレッサーパンダがいます。愛称「リボン」という高齢個体です。2022年1月の朝、飼育員からリボンが立ってないという連絡を受け、現場に向かいました。昨日までは普通でしたが、その日は両後肢に力が入っておらず、腕立て伏せの状態でした。以前からリボンは両目とも白内障で見えていなかったため、展示場と寝室に設置していた全ての台を低く改



写真1 CT検査を受ける「リボン」



写真2 「リボン」への鍼治療

良し、落ちて問題ない高さにしていました。CTやMRIなどの検査結果から、脊椎梗塞の可能性が高く、マッサージや鍼治療などのリハビリを行って状態の改善を目指すことにしました。毎日の点眼処置はリンゴを食べている間に行っており、リボンもさほど気にしていませんが、マッサージや鍼治療はおそらくこの個体にとって負担となる行為でしょう。ですがそれを考えても、状態がよくなる可能性があるなら試したいと強く思いました。

鍼治療の定義は、硬い鍼を治療、疾病予防および健康維持の目的で体内に刺すことです。まずは鍼治療を行うための機械や鍼を購入し、リハビリテーションの本を読み始めました。レッサーパンダの経穴について掲載しているものはなかったので、イヌの経穴を参考にしながら、週1回の鍼治療をスタートしました。手順としては、経穴と思われる部位に鍼を刺し、コードのついたクリップを装着し、電気を流します。「ビクン、ビクン」と電気が流れるリズムに合わせて足が収縮し始めました。「できた！」と思いました。その後、歩くまでには至りませんが、後肢を触ると屈伸するような動作をしたり、上半身を持ち上げると足をかくような動作をするようになりました。この変化に飼育員と一緒に喜びました。しかし、そこから1か月ほど経ちましたが、状態にほと

んど変化はありませんでした。「できたと思ったけれど、できていなかった？そもそも鍼治療という選択肢は合っている？」と自分を疑うようになりました。人では鍼灸師は国家資格が必要です。よく考えたらそんな簡単なものではありません。今まで行ったことのない新しい治療を試して、反応があったことを喜び、満足してこれを持続できればよいと思いを止めていた自分に気付きました。本当に恥ずかしい限りです。

「できるまでやれば、できる」。この言葉にはいろんな意味が含まれている気がします。諦めるなということ、そして「できる」とは何かということです。一つのことを、全力で精一杯やり尽くすことで、自分を信じる「自信」が生まれ、それがあからこそ、また新たな「できない」に気付くことができる。そうやって少しずつ視野が広がり、少しずつできることが増えて、目指すものに近づいていくのかなと思います。

現在は人の鍼治療の動画を見たり、実際人の現場で働かれている理学療法士や鍼灸師にコンタクトを取り、アドバイスをいただいています。物事を広い視野で見るためにも、一つ一つの問題に真正面からぶつかってステップアップしていきたいです。



うちの自慢の工具箱！



和田夏海（マリンワールド海の中道）

当館の自慢の工具箱として、超音波検査機器（以下エコー）用の手作りボックスをご紹介します。水族館の診察では1日1回は必ず使うと言っても過言ではないほど高い頻度で使用するエコーですが、水の生き物を診察する際に最も恐れているのは「水がかかって機器が故障すること」。当館のエコーには防水機能がないため、特に気を使わなくてはなりません。また、屋外で使用する際には画面を見やすくするために日除けも必要になります。そこで自作したのが画像のボックスです。ホームセンターで購入したストックアの側面を切り抜いてのぞき窓を作成し、防水、日除け兼用の万能ボックスが出来上がりました（しかも費用は3000円程度と、とても安価）。このボックスの中に入れて、検査直前までのぞき窓を壁側に向けておけば、水がかかる心配もありません。とてもシンプルなアイテムですが、日常の検査に欠かせない存在となりました。



日動水誌より

田中悠介（仙台うみの杜水族館）

第 63 巻 第 2 号 2021 年 9 月に掲載された獣医学関連記事の紹介

事例報告

「腰椎骨折のホンダタヌキに対しエポキシパテを用いた創外固定による治療の一例」

田中宗平，木戸伸英，近江谷知子，上手裕子，桐生大輔，内堀杏子

起立不能な状態で保護されたホンダタヌキに第一腰椎の骨折を認めた。麻酔下で片側椎弓切除術及びキルシュナーワイヤーとエポキシパテによる創外固定術を実施した。術後はケージレスト及び用手によるリハビリテーションを実施した。第 20 病日には固有位置感覚が回復したため創外固定を抜去した。第 55 病日には健康個体と比較し運動状態に遜色がみられないほど回復した。本法はホンダタヌキの腰椎骨折に退位し有用であると考えられた。



前号では、学生会代表を経験された山崎翔気さんに、公務員獣医師として働く傍ら、猛禽類のプロとしてのフィールド調査の魅力をご紹介いただきました。今号では、学生会設立当時のメンバーの一人であり、現在は動物病院の院長としてご活躍されている玉井勘次さんに、学生時代から動物園勤務、現在に至るまでのエピソードをご紹介いただきます。

野鳥発、クジラ・動物園経由、開業（動物病院）行き

玉井勘次（たまい動物病院，NPO 法人どうぶつたちの病院）

この連載，23 人目のランナーとしてバトンを受け取りました。約 10 年を動物園で獣医師として勤めた後，動物病院を開業して 6 年になります。

執筆するにあたって，編集委員から与えられた本連載のテーマは「リレー連載の大きな目的としましては，執筆者の学生時代の野生動物との関わり方，社会人に至るまでのエピソード，さらには社会人としての現在，職業等をご紹介いただくことで，将来を考える学生さんが視野を広げる契機とする」というものでした。

ニュースレターを読む学生会員の皆さんが必ずしも獣医系とは限りませんが，拙稿が参考になれば幸いです。

■大学入学，部活動

私が鹿児島大学農学部獣医学科に入学したのは 1998 年，当時はまだ学生会も存在せず，母校のカリキュラムには生態学や野生動物学など，ほとんどない時代でした。もっとも入学するまでは野生動物への興味や関心は漠然としたもので，当該分野に優れた大学がどこかなど，十分に下調べもせず入学したのですから，自業自得というものです。

当初はどこから手を付けたらよいのか，皆目分かりませんでした。カリキュラムがだめなら部活動から，と「野鳥研究会」に入部して少しずつ地元の野鳥に対する知識を増やしていきました。よい探鳥地と部の先輩に恵まれたのが幸いでした。生物調査会社で働く先輩の伝手からのツル類の飛行経路調査やカラフトワシの行動調査などのアルバイトは，経験と収入の両面で学生生活を支えてくれました。また，当時コウノトリの郷公園で獣医師をされていた M 先輩と偶然部室でお会いして，日本野生動物医学会第 7 回大会（日本大学，2001）の情報を得ることで，初めてこの学会と繋がる機会を得たのでした。

■日本野生動物医学会，学生会

2001 年に日本大学で開催された大会は，学生会の設立前夜にあたります。自由集会「野生動物関連の活動をこころざす学生の集会」と，その開催後に日大周辺の居酒屋で行われた飲み会。初代代表的場さんを中心に，志を同じくするものが集い，熱く語り合いました。先行していた酪農学園大学などいくつかの大学に加わる形で，鹿児島大学支部を作ることをその場で約束しました。20 年を経た今も学生会が続いていることには感慨深いものがあります。

■マッコウクジラのマスストランディング

大学 4 年生で研究室に配属され，ウンを用いて神経生理学の実験をしていた頃，マッコウクジラ 14 頭のマスストランディング（集団座礁）が発生しました。縁あって遠洋水産研究所の試料採取のお手伝いをするようになったのですが，この事件に関わったことは，後の学生生活に大きく影響を与えました。

20 年も前の事件ですので，ご存じない方も多いでしょう。とても印象深い出来事でしたので，紙幅を割いて紹介いたします。

2002 年 1 月 22 日，鹿児島県の南西部にある大浦町の堤防に 14 頭のマッコウクジラが生きた状態で座礁しました（写真 1）。14 頭のうち 1 頭は翌 23 日に救助に成功，船に引かれて 7 km 沖合で放されました。

残りの 13 頭は残念ながら死亡し，座礁した場所から近隣の小湊漁港まで移動。12 m と小型の 1 頭は埋却地として確保された



写真 1 座礁したマッコウクジラ



写真2 砂浜に埋却



写真3 海洋投棄を終えて

砂浜にて解剖の後、骨格標本とするために砂浜に埋却（写真2）。現在は現地にて展示されています（くじらの眠る丘・座礁くじら記念碑）。

比較的小型の1頭を埋却地に運搬するだけで機材の消耗が著しく、進行する腐敗と必要な時間からも他の個体の標本化は断念せざるを得なかったと聞いています。残りは海中深くに沈められることになったのですが、この12頭から上顎歯（齢査定用）、表皮（DNA検索用）、脂皮（汚染物質調査用）を採取していくのが私（たち）の仕事でした。

小湊漁港に巡らされたオイルフェンス内に浮かぶクジラの遺体。水面には漏れ出る油脂が貯まっています。貯木場の丸太の様に並ぶクジラの上を歩き回り、表皮と脂皮を採取するために解剖刀を突き立てます。すでに相当に腐敗は進行しており、腹腔内はガスで充満、切り取る三角形の最後の1辺を入れると、シャンパンの栓を抜いたように、ポンっと溶解した筋肉汁とガスが吹き出します。腐敗した海棲哺乳類の匂いのひどさは言うに及ばずですが、50t級12個体分は想像を絶しました。後にも先にも、あれほどの臭さは経験がありません。

作業に使う雨具はあまりの匂いに使い捨てざるを得ませんでした。泊まり込みの作業のため、確保していただいた宿の方もさぞ驚かれたことと思います。とはいえ、天災のように降りかかった事件に皆で立ち向かっている状況でしたので、嫌な顔ひとつされず、ご馳走を準備してくださっていたのを覚えています。

学生的身分では知る由もありませんでしたが、当時、漂着海棲哺乳類の死体は焼却か埋却という水産庁からの通達があり、海洋

投棄が認められるまでに時間を要したようです。また当時の現地は、季節柄1週間のうちに風が半日から1日しかないという海況で、いざ海洋投棄といっても状況はなかなか進みませんでした。座礁から11日後、比較的波が穏やかになったということで、台船3隻に載せられた12頭のクジラは沖合に移動を始めます。船上では、海面に浮かんでいる状態では採取できなかった上顎歯を取るために悪戦苦闘。自分の親指より太いマッコウクジラの歯は非常に固い線維で固定されており、慣れない内はいくら切ってもなかなか抜けませんでした。途中でコツを挿んだように記憶しているのですが、まだ体が覚えているでしょうか。

12頭を沈める作業は野間岬沖約10km、水深200mの海域で行われました。「生きている時点でのマッコウクジラの比重は0.98とされているが、死亡してから日数が経っており、今の比重は0.6程度。腹を割って体腔内のガスを抜き、比重0.7位に想定したおもりを付ければ沈むのではないか」という検討から最大の個体ではコンクリート塊13個、計36.11tを付けて沈めたそうです（12頭を沈めるのに要したのは総計254.04tとのこと）。途中でワイヤーが切れる、クレーンの故障、滑車の故障なども相次ぎ、誰も怪我をしなかったのは本当に幸いでした。記録を読むと、最後の1頭が沈んだのが20時19分、とのことなのですが、その後何時に帰港し、どうやって帰ったのか、覚えていないほど疲労していました（写真3）。

■海外でもストラランディング

マーストラランディングから1か月後、故森田正治先生の企画



写真4 カリフォルニアでのザトウクジラの幼獣の解剖

された第2回カリフォルニア野生動物レスキュー研修ツアーに参加し、その足でThe Marine Mammal Center (TMMC) という海棲哺乳類の救護・研究施設でインターンをしました。

ここでザトウクジラのストランディングがあり、今度はヒゲクジラの解剖に立ち会うことになりました。指導を担当して下さったH先生の運転するピックアップトラックで片道数時間。道中した話で今でも覚えているのは日本語で“shit!”は何と言うのか? とか、好きなロックバンドは何? というようなくだららないことばかり。真面目な話もしたはずなのですが。

到着したのは広い砂丘。道も目印もない所に、どうやって集まってきたのか(当時GPSは一般的でない)、地元の博物館の方たちと一緒にザトウクジラ幼獣の解剖をします。見事な鯨包丁さばきで手早く切り開いていきます(写真4)。マッコウクジラの時とは異なり、遺体が新鮮なため臭気は少なく、帰路の車内もそれほど気にはなりませんでした。

TMMCではアシカのMRI検査、ラッコ腹腔内へのデータロガーの設置など、刺激的で濃密な1週間を過ごしました。インターンが終わる頃には、H先生の口癖が“ku sol!”になっていたのはご愛敬です。

■卒業、就職

以降、すっかり鯨類に染まって、卒論はかごしま水族館のハンドウイルカで書きました。6年時は2か月弱、研究室を空けて調査捕鯨の調査員をしたことで一区切りつけ、就職は期限付きの嘱託ではありますが、よこはま動物園ズーラシアでお世話になることとなりました。

鹿児島ので野生動物をライフワークにしていくために、どうしたらよいか。そのためには鹿児島市立の動物園である平川動物公園への配属を目指すのが妥当と考えました。当時、平川動物公園に配属されるためには、鹿児島市に入庁して異動希望を出し続けるのが唯一の方法でした。新卒で配属を願うより、他園での経験を梃子にすることで勝率が高まると踏んだからです。

■平川動物公園

2年3か月のズーラシアでの勤務の後、半年の動物病院院長(アルバイト)を経て鹿児島市に入庁しました。初年度は保健所の食品衛生係に配属されましたが、幸いにして1年で希望通り、平川動物公園への異動がかないました。この1年間の保健所勤務で、自分にとっては臨床にいたことが人生の軸なのだと思えること

ができました。この時の臨床に飢えた思いが、後の開業に至る覚悟に繋がっていきました。

動物公園では色々なことがありました。マサイキリンに待望の仔が生まれたものの起立不能で、泊まり込みでケアしたこと。一緒に泊まった担当のキーパーのMさんは平川動物公園で歴代最長のキャリアを誇る生き字引で、多数のキリンで人工哺育を成功させてきた方でした。父フジ、母アヤメにちなんでMさんが「スマレ」と名付けた仔キリンは、当初は頭を持ち上げることさえできませんでしたが、人工哺育に加えて園としては初めてキリンに静脈点滴を施すなど手を尽くしたところ、3日目に自力で頭を支え、立ち上がろうとする素振りを見せるまでになりました。しかし改善もそこまで、結局一度も立ち上がることなく、6日目に息を引き取りました。Mさんにとっても、長い職歴でとりわけ印象深かったと、今でも思い出話に出てくる1頭です(写真5)。

在職中、動物公園はちょうどリニューアルの時期でした。具体的な内容自体は筆者の異動前にすでに決まっていたので、実際に関わることができたのは掲示物(サイン)についてと、動物たちの移動が主でした。飼育の現場の意向より、リニューアルセレモニーとその来賓の都合が優先される異常なスケジュールには悩まされました。クマ8頭(ホッキョクグマ2頭を含む)に麻酔をかけて移動させるのに与えられた時間がわずか3日というのに始まって、次は1日でダマジカ9頭に麻酔をかけて移動。今度は1日でマゲシカ18頭。最後はハナジカ40頭と、どんどんエスカレートしていきました。与えられた条件の中で麻酔事故が起きないように、できるだけ工夫は凝らしましたが、最終的に1頭も死なせずにすんだのは幸運だったに過ぎないと思っています(写真6)。

エピソードには事欠かないのですが、冗長になるのでこの位にして、動物園に勤務する獣医師として大切にしていたことを記しておきます。

1. 動物園を構成するスタッフ、動物たち、施設設備を健全な状態で維持すること
2. 動物園としての役割(社会的責任)を果たすこと
3. 動物園とその派生物に価値を付与すること(調査研究・思想)
4. 1から3に「博物館としての矜持」を徹底させること

1のためにはスタッフの自己実現や相互の切磋琢磨は不可欠です。そのために勉強会の開催や園外の専門家との交流・情報交換、地元の野生動物を観察すること、研究会などの場で発表すること

鹿児島市の平川動物公園で十三日、マサイキリンの赤ちゃんが誕生した。同園で飼育する父親フジと母親アヤメの子でメス。冬の厳しい寒さにも耐えてきれいな花を咲かせるよう「スマレ」と名付けた。

高さ一七四センチ。これまで同園で生まれた赤ちゃんよりも小さかった。体温が低く、体調も不良で、生まれた直後は命の心配さえあった。通常は一、二時間で立ち上がるが、自力で立つ様子がなかったため、飼育員らが必要に看病。抗生物質の注射やビタミン剤を混ぜた点滴などで治療している。

「スマレ」ですよろしく

現在、牛用の代用乳をたくさん飲むなど体調が改善。起立する前段階の首上げも自力で支えられるようになり、十五日には、立ち上がるようになるしくさも見えるようになった。

獣医師の玉井勲次さん

平川動物公園

(三)は「バランスの取り方や筋力をつけるトレーニングを続けていく。元気な姿を早く見せられるように、大事に見守りたい」と話した。スマレの誕生で同園のキリンは、オス一頭、メス四頭の計五頭になった。



写真5 平川動物公園のキリン飼育の新聞記事(南日本新聞、2008年12月17日)

などを実施しましたが、振り返ってみれば、学生部会でしていたことと同じですね。展示動物の健康管理や施設の整備・更新などの仕事が重要なのは言うまでもありません。

2の動物園の社会的責任については「誤った動物観の流布に加担しない。できるだけ修正する」「地元の野生動物を守るために、



写真6 平川動物公園のリニューアル時の動物の移動

動物園ならではの知識や技術を提供する」「野生動物の人間界における代弁者として最善を尽くす」をモットーにしていました。

3については、自分自身のできる部分が限られていたため、他者に材料を提供する（便宜をはかる、結びつける）ことにも注力しました。本学会会員の諸先生方には、大変お世話になりました。

4が動物園が動物園たる魂の部分だと今でも思っています。

■動物病院開業

指定管理者制度で、平川動物公園が市の直営から法人委託となりました。前述のとおり臨床の現場に生き甲斐を見出していましたし、鹿児島を離れたくなかったので、思い切って動物臨床に転身、開業することにしました。妻が小動物臨床で勤務獣医師として8年、ちょうどよいタイミングだったとも言えます。

筆者が院長としてエキゾチック・アニマルを主に担当し、妻が副院長としてイヌ・ネコを主に担当し、お互いに協力し合う、というやり方で開業から6年、何とかやってきました。イヌ・ネコはともかく「エキゾ」と呼ばれる動物たちとその飼い主たちには複雑な思いを抱かざるを得ないこともあります。コンパニオン・アニマル（伴侶動物）とペット（愛玩動物）の語感が異なる

のと同様に、ウサギとリスザルでは「エキゾ」の意味が変わってきます。野生動物を消費する人たちの片棒を担ぐようなことは絶対にしたくない、その一方ですでに劣悪な条件に置かれてしまった個体を見過ごす訳にもいかない、というのは本当にジレンマです。その個体の健康と福祉を回復させつつ、飼育者を啓発しつつ、次の犠牲を生み出さないように、と努力はしているつもりですが、道半ばと言わざるを得ません。

臨床をやりつつ、少しでも地元の野生動物に貢献したいということで、年に10数件ですが傷病鳥獣の受け入れをしています。身近な種の割合が意外に低く、ハヤブサやアカショウビン、オオミズナギドリなど様々な種（主に鳥類）が来院します。

また、NPO法人「どうぶつたちの病院」の理事として、微力ではありますがツシマヤマネコ保全のお手伝いもしています。この法人は対馬で動物病院を運営し、地域で飼育される動物

たちの適正な飼育をサポートし、動物医療を提供しています。野外生活のイエネコの個体数と媒介する疾病の増加を抑え、もって当地で絶滅に瀕するツシマヤマネコの保全に資することが目的です。また、島内の環境省の施設にて飼育されるツシマヤマネコの健康管理業務を受託、実施しています。当法人では獣医師、飼育員ともに就業希望者のインターンを受け入れていますので、興味をお持ちの学生、転職希望の社会人はどうぞご参加ください（NPO法人どうぶつたちの病院 <https://yamaneko2010.jimdo.com/>）。

■さいごに

動物病院の院長は、職住一体の自営業で仕事から離れられることがありません。その代わりに、家族とともに過ごす機会は確実に増えました。息子たちの「ただいま」に診察しながらでも「おかえり」と返せるのは実に嬉しいものです。

自分の望む仕事をして糧を得るのに、学生時代からこれまでの全ての経験が役に立っています。皆さんの学生生活に幸多からんことを。

現場レポート

突撃！お仕事現場拝見！

「教えて！先輩」に代わっての新コーナーは、先輩たちの仕事現場を拝見させていただきます。仕事内容だけでなく気になる1日のスケジュールなど細かくご紹介し、その思いまで伺います。トップバッターは「学生会から」でも登場した伊藤圭子さんです。

※今後拝見したいお仕事現場があれば自薦他薦問わず広く募集中です！

所属 奄美いんまや動物病院 お名前 伊藤 圭子

1. お仕事の内容について教えてください

仕事の流れ／勤務時間／必要とされるスキルやあるとよいスキルなど／この現場で特にみてほしいポイントやぜひご紹介したいものなど

いわゆる一般的なイヌネコをメインとした小動物の動物病院にはなりますが、建物とは別に診療車（救急車のように後部が診察室のように改造してある）を持っているので、それに乗って普段動物病院のないさらなる離島（メインは喜界島，加計呂麻島）へ定期的に診療に行っています。

土地柄（僻地離島&世界自然遺産登録地で野生動物も多い）や自分の興味のあることというのも含めて

- ・野生傷病鳥獣の受け入れ，治療，これらに伴う啓発
- ・適正飼育の普及啓発



写真1 出張診療では公民館を借りるため，車内（診察室）に入る前に公民館ロビーで問診を取ることもあります。

・保護ネコ譲渡

これらは意識して取り組んでいます。この辺が割と目立つので、普通の病院よりやっていることは多岐にわたるかもしれません（そういう病院は各地にもありますが！）。

いわゆるホームドクター的な位置にあるので、高度医療ではなく、一般的な予防や治療です。診療車をもって出向く離島も病院が普段なければちょっとした予防や不妊手術さえできないからです。当たり前のことがないということは、当たり前であるはずの飼い方から聞く機会がないわけです。

奄美大島では野生化したネコが在来種を捕食してしまう問題があり、飼いネコも登録を行う制度（ネコ条例）があります。ネコ条例を普及させることや、なぜそれが必要なかを理解してもらうことは日常的に診療において会話に含めていますし、変えた方がよさそうな点や気になることなどは積極的に行政にも提案しています。チラシを作製して使ってもらうこともあります。

行政主体でTNR（ノラネコがこれ以上増えないように不妊化し元に戻すこと）を市街地のノラネコに対し実施していますが、



写真2 弱って保護されたアオウミガメが来ることもあります。



写真3 野生復帰できないハヤブサを訓練し、講演会などで見ってもらうこともあります。今いる個体はとても落ち着いて子供たちもよるこんでくれます。

元に戻すことは決してベストではないので、できる限り保護に回しています。適切に飼育できる方へ譲渡することで「当たり前の適正飼育」が普及することにもつながると思っています。

ネコ関連、野生動物関連で講演を依頼されることや、会議参加を依頼されることは多いですが、できる限りお受けするようにしています。

なので、対人対話スキルや啓発アイデア、創意工夫、自分で進言する意欲は結構大事だと思います。

タイムスケジュール

朝 8 時頃	起床・家のネコの世話
↓	出勤、入院動物の世話など
9:00 ~ 12:00	診察
12:00 ~ 15:00	手術など、昼休憩
15:00 ~ 18:30	診察
↓	掃除
終わり次第帰宅	

野生動物や急患に関しては随時対応の場合があります。緊急用携帯を持っているのでかかってくることもあります。そんなに多くはありません。

休みの日もたいてい病院に保護ネコや入院動物がいるので、世話や管理が合間に入ってきます。鳥を見に行ったり、海にクジラ調査に同行したり、外に出る機会は多めですが基本怠惰なので昼

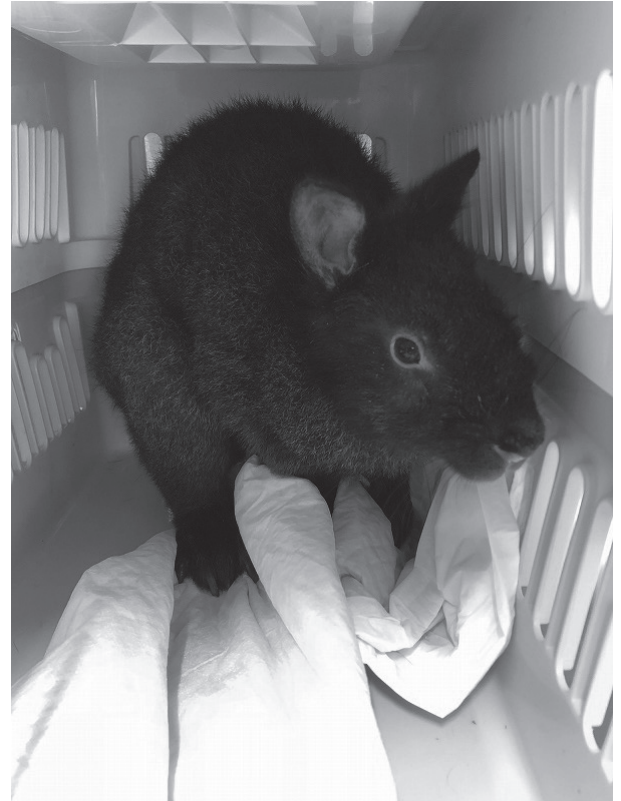


写真4 アマミノクロウサギも保護されてくることがあります。



写真5 リュウキュウアオヘビを食べるネコ。ネコは室内で大切に飼われるべき愛玩動物で、野外で生きることはネコにとってもヘビにとっても不幸です。

過ぎまで寝ていることもあります。島にいる限り自然環境はどこにでも近くにあるので、通勤路もバードウォッチングの場です。



写真6 レスキューボックス（中はネコですが）はこんな感じで簡易組み立て式です

2. 現在までの経緯について

きっかけ／それに対して努力したこと大変だったこと／学生時代にしていたことなど

学生のころから臨床をやりつつ、傷病鳥獣救護というアプローチをもって野生動物に関わりたと思っていました（奄美大島なのは、卒論のテーマが奄美大島のマンガースだったことがきっかけです）。

傷病鳥獣救護を取り組んでいきたいとなると、それ専門の施設かウチのような一般の動物病院で取り組んでいるところになると思います。ただ、多くはないです。また、「かわいそうな野生動物を助けてあげたい」というような気持ちだけでは扱えないと思います。いかに生態系に貢献させる活動にまでもっていくか、ただ個を助けるだけではないことを念頭においていないといけません。

学生のころから野生動物の救護施設や伴う NGO を手伝ってはいましたが、いわゆる一般のイヌネコの病院ではそれほど直接その経験が活かされるわけではありません（病院によるとは思いますが、普通の動物病院では「変わった経験していた人」程度だっ

たりします）まずはイヌネコを中心とした飼育動物の治療やケア、そして飼い主さんをはじめとした対人スキルは基礎としてしっかり持って、次に野生動物の治療に活かせると感じました。

3. 今特に取り組んでいることや抱えているプロジェクトなどあれば教えてください

研究論文や資料、グラフなど

私自身が研究材料提供をすることが結構好きなので野生傷病鳥獣は血液や外部寄生虫を採材して大学へ提供したり、病理組織検査を依頼し状況により発表してもらうこと、ノラネコの血液や糞便を検査材料提供することなど、場合によってはこちらから「こういう材料ならある程度取れますが、調査研究しませんか」と持ち掛けることもあります。

最近では野生傷病鳥獣の搬送用レスキューボックスを企業さんと共同開発しました。

簡易組み立て式になっており、ガムテープなどを必要とせず、搬送・相談先一覧や保護が必要かどうかの判断などを書いた紙をそえています。



写真7 病院は簡素なプレハブです。中はごく普通の病院です。手前にドッグラン、出張用診療車があります

これまでは傷病個体の発見後の搬送が不適切なケース（暴れさせてしまった動物への負担、感染症の危険、汚れなど）が多いので、「車に1セット積んでおいてもらう」「もしも見つけた場合は本当に保護が必要か判断し、回収搬送の相談をしてもらう」ためのものです。

4. 一番のやりがいもしくは楽しいことなど

行政などに提案したことがうまく通った時や、上記の搬送用ボックスが売れ、適切な搬送意識の底上げになれるかな！と思えた時はわくわくします。自分の持っている技術やアイデア、経験を活用してもらえる機会はこれからも積極的に作っていきたいと思っています。

5. 一番つらいところもしくは苦労するところなど

適正飼育への啓発は本当に地道で成果が見えにくいです。ネコを外飼いし平気で「うちのネコよく野鳥捕ってくるのよ〜」など聞かされると「その野鳥も同じ命ですよ」と、未然に防げたかもしれない命が失われていることに心苦しさを覚えることもあります。どれだけ伝えても外に出し続け、交通事故やハブに咬まれて死んでしまったりするともっと早くに止められたのではないかと考えてしまいます。

飼育動物の適正飼育と野生動物の保護保全は両輪だと感じるので、どちらにも対応しつつ、理解をしてもらうのは大変だな！とぼやきながら、楽しみながら、と心がけています。



写真8 動物病院のない離島では中で診療を行えるように改造した車で出向きます。

6. 今後の目標

すべての飼育動物が適切に飼われ、野生動物への被害がなくなっていくこと。

ノラネコがいたなんて時代は過去のものになってほしい。少しずつそれが現実になるべく、頑張っています。

7. 学会員みなさんへ（特に学生会員に）ひとこと

救護というアプローチにあこがれるのは野生動物に関わりたい！という一番最初の発想によくあるものかな、と思います。私もそうでした。

決してやさしい気持ちだけではできないこと、野生動物は「助けて欲しい」と望んでいることはなく、生態系で糧となる環を絶ってしまったかもしれないことも忘れてはいけません。

助けられる命も多くはないので、ただ目の前の命の救命如何だけではなく、死んでも活かせる道を考えること、いかに保護される前に防ぐこと、治療行為以外でもできるアプローチはたくさんあることを知っていてほしいです。

また、助けるために最も大事なことは、あるべき姿を知っていること。つまり、フィールドにたくさん出て行ってほしいです。遠くに行かなくても、身近なところにもどこにでもフィールドはあります。たくさん時間があるのは学生の特権。たくさん現場を見て知ってほしいです。

ご協力ありがとうございました！



ワンヘルスから見た動物防災

船津敏弘（動物環境科学研究所・福岡県）

■はじめに

東日本大震災から11年、熊本地震からもうすぐ6年になろうとしているが、現在の日本はコロナウイルス感染症や戦争など新たな災害の驚異にさらされている。その一方で地震や自然災害への備えは十分とは言えないが、社会の意識は薄らいできたように感じていた。そんな中、3月16日には福島県沖でM7.3の地震が発生し、2人が死亡し、けが人は100人超に上った。その後も小さいながらも地震が頻発しており、あらためて自然災害が身近にあることを思い知らされた。

筆者は35年の小動物病院開業の後、現在は「動物のこころ」をテーマとした研究をしているが、東日本大震災で動物の救護活動に従事した経験などから動物の防災についての執筆や講演依頼なども多く、今回も歴史ある貴会よりご依頼をいただいたことはたいへんな名誉であると感じているところである。拙い経験ではあるが、小動物の獣医師の立場からワンヘルスと動物防災について簡単に紹介したいと思う。

■ワンヘルス

令和4年2月12日と13日、福岡市において「福岡県“One Health”国際フォーラム2022」が開催された。コロナの影響もあり、残念ながら直接参加することはできなかったが、海外講師による2つの基調講演をはじめ、市民公開講演などでは人獣共通感染症や薬剤耐性・環境保護、防災などワンヘルスに関する数多くの話題が提供され、熱心な討議が行われた。

数多くの講演の中でも、ペットと一緒に暮らすことを推奨している高齢者施設「タイガープレイス」を設立し、人と動物の共生社会づくりに貢献されているミズーリ大学名誉教授のレベッカ・ジョンソン氏の基調講演が特に心に残った。「人と動物の健康はつながっている。さらに共通の環境の健全性ともつながっている。一つを守ればすべて守られる。全員の協力によってワンヘルスという概念が達成される。」という言葉である。ワンヘルスは人と動物の双方向的な関わりの中で育んでいくものであり、人間の目線だけとか、動物のためだけといった偏った考え方を調整することが大切なのである。

さらにレベッカ氏は日本の「IKIGAI（生き甲斐）」の素晴らしさをご紹介され、欧米の高齢者施設での人と動物の温かい関係

性について言及している。その中で犬や猫、そして馬などの動物たちに看取られながら旅立てる幸せについて語られた。しかし私はそれを聴きながら、動物飼育禁止施設にいる高齢者や身寄りのない日本の高齢者は、最後の時に誰にお別れを言うのだろうか？と考えてしまった。

またその一方で、もともと西洋に比べて自然環境に対する全体感が強い日本の場合には、ワンヘルスは当たり前のことだとも思う。日本人には曖昧にすることで人間同士はもちろん、動物や植物などともうまく付き合ってきた歴史があったはずである。しかし近年の日本では西洋化の進展とともに、それは失われてしまった。その結果が現在の日本なのである。

しかし、日本人には自然豊かな国土において、2万年以上命をつないできた歴史が刻み込まれていると私は思っている。どんなに科学技術が進歩してもただか数十年の変化で本能に刻み込まれた日本人としての感性をなくすはずはないだろう。今はただ忘れているだけなのである。

今回はワンヘルスという立場から、災害について、特に動物防災について福岡での取り組みの事例をご紹介します。日本人が持つ自然や動物との一体感を思い出していただきたいと思う。

■動物防災

2020年（令和2年）全国犬猫飼育実態調査によると、全国で犬は848万9千頭、猫は964万4千頭飼育されている。また犬の飼育世帯率はおよそ12%、猫はおよそ10%である[1]。犬と猫の両方を飼育している世帯も少なくないが、犬猫以外の小鳥やウサギ、ハムスターなどのペットもいるので、全世帯の20%ほどが何らかの動物を飼育していることになる。

一度災害が起これば早期避難が基本であるのはもちろんだが、自分の意思で自発的に避難できない動物たちは、避難が遅れがちになり、そのことが飼い主の避難を遅らせてしまう理由の一つになる。

被災地の20%の世帯の避難が遅れば、遅れた分だけ焦ってパニックを起こすかもしれない。また残された住民の救出のためにレスキュー隊や自衛隊のマンパワーを奪ってしまうこともあるだろう。

避難は災害発生前後の短期間に集中的に行われることがほとんどである。避難行動は避難所に向かって一方向に流れるのが望ましい。たとえば自宅に戻るような行動は、流れに逆らうことになり、避難の大きな妨げになる。さらに自宅に残したペットを避難させようとして自宅に戻ることで、飼い主が二次災害に巻



写真1 無人となった富岡町中心部



写真2 痩せた被災猫を保護するボランティア

き込まれる例が後を絶たない。家族が必ず同行避難して自分のペットを安全な場所に避難させていると信じられる状況を家族間で作れるようにしなければならない。

■東日本大震災

東日本大震災は2011年3月11日14時46分頃、三陸沖を震源として発生したマグニチュード(M)9.0の地震である。これは、日本国内観測史上最大規模のもので、世界でも4番目の規模の地震である。

この東日本大震災による福島第一原発事故の時には、同行避難できる状況であったにもかかわらず自宅に残したために4000頭以上の犬猫の命が奪われた。飼い主達の中には「もしいっしょに連れて行っていたら…」という大きなグリーフを一生かかえることになった方も少なくない。私は獣医師として福島警戒区域内の立入禁止区域に取り残された犬や猫の救助活動を行ったが、取り残された犬猫の遺体を数多く目のあたりにした。ヒトと動物、双方の不幸を絶対に作らないように、飼い主はもちろんだが日本社会の中に「同行避難」を当たり前の認識にすることが必要なのである。

また、「この子がいるから避難しない」という飼い主も多かった。もちろんその根底には、津波はここまでは来ないだろうという思い込みもあったに違いない。それを差し引いても日本人には「ひとりりで死ぬのではない。一緒なら死んでもよい」という誤った死生観があるように感じる。

しかし、動物は決してそうではない。彼らは生きることについ

ては明白な要求を持っている。決して飼い主と「死にたい」から飼い主のそばを離れないのではないだろう。彼らは最後まで「生きる」ために信頼できる飼い主のそばにいるのだ。

そのことを飼い主にきちんと伝えることが、動物の専門家としての私の役目だと思っている。

■VMAT

この東日本大震災の反省から、2013年に福岡県獣医師会において日本初のVMAT部隊が結成された。

VMAT (Veterinary Medical Assistance Team: 災害派遣獣医療チーム)とは獣医師、愛玩動物看護師、動物トレーナー、トリマーなど1チーム4~5名で構成され、大規模災害や多くの傷病動物が発生した事故などの現場で、急性期(おおむね48時間以内)に活動できる、専門的な訓練を受けた獣医療チームのことである。(図1)

VMATの主な任務は被災地からの動物の救出及び保護、そして安全な後方搬送である。また、避難所やシェルターにおけるヒトと動物の安全な生活の維持である。これは人間の災害時救急部隊であるDMATの一部(救急救命と安定化治療)と消防の一部(救出・保護と後方搬送)、そして保健医療の一部(避難所での健康管理)を合わせたようなものとお考えいただければよいだろう。

VMATはあくまでも災害発生時において行政が十分に機能することができない発災から48時間以内をカバーするための動物救護チームであり、人的支援が落ち着いたあとは従来通り動物救護の主体は行政に移管され、VMATはその指揮下に入ることになる。

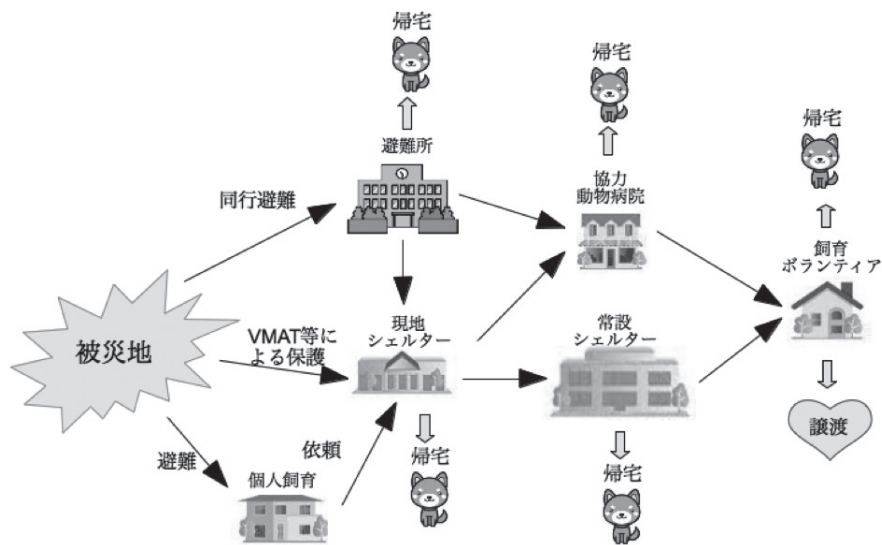


図1 VMATによる被災地における動物救護体制

これまでの動物救護体制は、災害が発生してから対策本部を立ち上げ、救護班を編成し、各方面との調整を行った後に初めて活動することができるものであった。しかし、大規模災害の時には行政機関は人命救助に翻弄され、動物の救護については長い間一時停止状態となることが多かった。そのために神戸や福島などの多くの被災地では、初期における動物の救護が遅れ、それが悲劇の一因となってしまったのである。

このことを深く反省し、新しい動物救護体制は災害が発生してから48時間以内の動物救護を最重要課題として検討を重ねた。そしてVMATを中心とした初期活動を自主的に行える実行部隊を平常より組織し、その教育とトレーニングを行うこととしたのである。(写真3)

福岡VMATは2016年の熊本地震への対応のために初めて被災地へ出動した。(後述)その後2回の九州北部豪雨災害へも出動している。

福岡に続いて、群馬県、大阪府、北九州市、熊本県、沖縄県、鹿児島県など多くの地方獣医師会にVMATは設立され、日本獣医師会でも全国展開のための教育システムの構築に乗り出した。

■熊本地震

2016年4月14日21時26分、さらにその28時間後の4月16日1時25分に、熊本県熊本地方を震央とする、M7.3の地震(本震)が続いて発生し、熊本県西原村と益城町で震度7を観測した。この地震は1995年に発生した兵庫県南部地震(阪神・淡路大震



写真3 同行避難訓練に参加するVMAT

災)と同規模の大地震であった。

テレビなどで熊本県の人的被害や建物の被災状況が明らかになるに従い、今回の地震が想定をはるかに超えたものであることは分かった。しかし動物の被災状況については報道されることはほとんどなく、隣県の福岡であっても被災動物の情報はまったく得られなかった。

そこで私を含めてVMAT3名の調査隊は本震より40時間後には熊本市に入り、熊本県庁および熊本県獣医師会、市内動物病院、避難所などを調査して、被災状況を日本獣医師会及び福岡県獣医



写真4 孤立した西原村へ初めての物資輸送



写真5 やさしく相談を受ける VMAT 隊員



写真6 九州災害時動物救援センター外観

師会に報告した。

益城町総合体育館では入り口、受付横、通路などに一般の避難者に混じって犬がおとなしく座っていた。この避難所では犬 22 頭、猫 3 頭が同行避難しているのが確認できた。我々は情報収集のため飼い主と話をするように心がけたが、ほとんどの被災飼い主は放心状態であり、なかなか情報を聞き出すことはできなかった。

避難所におけるヒトと動物の分離はほとんどなされておらず、通路や階段の下、また室内にも人間と同じように犬や猫が生活していた。お互いの健康を考えると、早期に何らかの手立てを講じる必要があることを担当者に説明したが、混乱している避難所ではそのような基本的なことですら実施することは難しいようだった。

福岡 VMAT 本隊は本震より 8 日目に男性獣医師 3 名、女性獣医師 2 名の計 5 名で支援を開始した。避難所などを巡回し、動物の避難状況の確認及び避難者よりの聞き取りと必要品の確認を行い、孤立した西原村へ支援物資を届けた。(写真 4)

その後、5 月 8 日(日)までの 15 日間、のべ 60 名の VMAT 隊員がほぼ毎日福岡から通いながら交代で作業に従事した。福岡を 6 時から 7 時に出発し、2～3 時間かけて熊本に到着後、10 時から作業を開始し、17 時に解散して福岡に帰るという隊員がほとんどであった。作業内容はペット相談コーナーにおいて、被災飼い主からのさまざまな相談に対応すること(写真 5)、避難所を巡回して環境整備に務めること、物資の輸送などが主であっ

た。

終了後のアンケートによると、参加した VMAT 隊員の 80% が自分の役に立つ活動だったと答えている。その一方、被災地の獣医師会及び行政との連絡や協力体制の不備が指摘された。これは行政をはじめとしたさまざまな業種で「人間が先、動物はその後」という根強い常識があったためであると思われた。現在は人と動物が家族のように一体化している。災害が起こったときに人命救助を優先することはもちろんであるが、人を救うためにこそ、動物を安全に移動させる手段を持つ必要があるのではないだろうか。これは動物園や水族館においても言えることであろう。

■九州災害時動物救援センター

九州災害時動物救援センターとは一般社団法人九州動物福祉協会が運営母体となって、九州圏で発生した大規模災害に対して広域的に対処するために準備された動物救護施設である。(写真 6)

平成 28 年 6 月 5 日から運営を開始し、熊本地震においては被災犬 50 頭、猫 20 頭の合計 70 頭を預かり飼育支援を行った。



写真7 ボランティアと語る被災犬

本センターは大分県九重町の3万平米の土地に、動物収容棟1棟、ドックラン5か所、コテージ14棟、研修室1棟、管理棟1棟、動物診療施設を準備している。コテージは収容動物だけでなく、ボランティアが自分の動物と一緒に宿泊しながらボランティア活動ができることも可能にしている。(写真7)

本センターは、1)被災動物の一時避難施設、2)防災教育活動、3)地域活性化、4)リタイヤ動物の終生飼育施設などを目的として活動している。(図2) 本シェルターは常設施設である特徴を生かして、災害時だけでなく平時にも人間の防災意識の向上とトレーニングができる準備をしているのが特徴である。

施設は標高700m以上の山間部にあり、交通の便も悪くボランティアなどの人的支援を受けにくいという欠点もあった。しかし、自然豊かな環境の中で動物を飼育することは、被災してストレスの多い動物達の健康面に対して、さらに支援するボランティアに対しても想像していた以上によい影響を与えることができたように思われる。また、フェンスに囲まれた広い敷地があるため、警察犬や救助犬の活動紹介や合同訓練なども実施しやすい。(写真8)

それらのことから九州災害時動物救援センターは、従来考えら

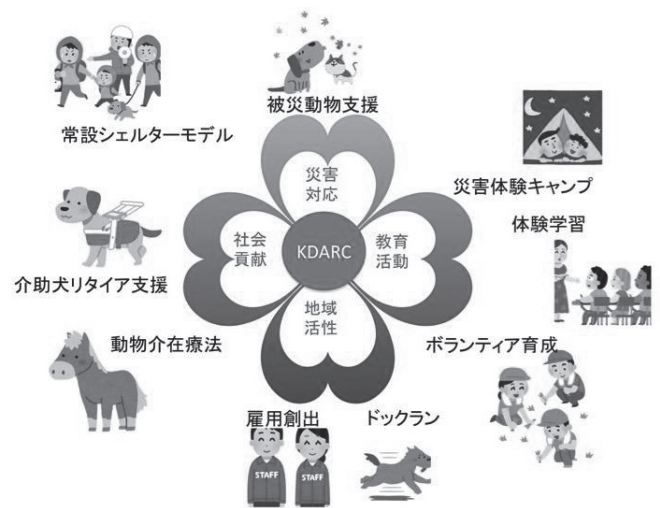


図2 九州災害時動物救援センターの目的

れていたシェルターの立地が被災地の近くだけでなく、九重町のような自然豊かな環境の中にも常設型のシェルターを作れるというモデルケースになった。

東南海地震や首都直下型地震などの発生が避けられない現状と



写真8 救助犬協会と合同訓練するVMAT

しては、全国に訓練教育施設および森林や野生動物などのワンヘルスを体験できる常設型のシェルターを複数の地点で準備できればよいと考えている。

■専門家として

災害というまれな状況においては、その受け取り方の個人差が大きく、それぞれの理解や対応も異なっている。しかし人間社会の統一性のなさによって、対応が遅れ被害を受けるのはまちがいに物言わぬ動物たちである。私はさまざまな動物の救護活動を行ったが、国や県、市町村、さらには原子力の専門部署、災害の担当部署など、さまざまな立場の違いによって、動物の救護が中止または延期されたのを実際に何度も経験した。動物たちの防災

や復興について提案できるのは、研究者や獣医師・愛玩動物看護師といった動物のプロにしかできないことだということをしっかりと認識する必要がある。

私は常に専門家としてどうあるべきかを考えている。獣医師が国家資格である意味は、まさしくヒトの健康のためにあるのだと思う。その意味でヒトが「健康のために食べる」とはもちろんだが、「安心して生きること」にも動物の存在が不可欠なのだ。

行政はさまざまな仕事で多忙な中、3割ほどの動物飼育者より7割の非飼育者を優先せざるをえないのかもしれない。しかし3割ものヒトの命を救うための方法の一つとして、動物をいかに効率的にそして安全に避難させるかということを考え、それが10割の命を救うことにつながる動物防災の意義について、社会

表1 避難訓練と同行避難の実施の有無の関連性

	すべてのペットと 同行避難した割合
避難訓練を実施していた	70.6%
避難訓練を実施していなかった	36.7%

(岩手県と福島県における被災ペットの実態・支援等に関する調査～被災飼い主のアンケート調査結果～, 山崎佐季子, Humane Society International)

に提言できるのは我々動物の専門家しかいないだろう。

その自覚を育成し、実践し、後世に伝えるために、緻密な実験や観察を積み上げ、科学のみならず文学や哲学、芸術などの他分野とも積極的に交流し、時には激論を戦わせ、本気で命と向き合うことが専門家の責務ではないだろうか。

■おわりに

人がものを考えたり理解したりする情報処理システムには2つあると言われている。一つは理性的・意識的・熟考的に行動する「理性的システム」であり、もう一つは動物的・無意識的・直感的に行動する「感情的システム」である [2]。避難訓練でいうとセミナー受講は「理性的システム」の構築であり、実際に避難所に行ってみることは「感情的システム」の訓練である。災害が発生した時には、一瞬の「迷い」が生死を分けることもある。東日本大震災における被災飼い主へのアンケート調査によると、避難訓練を実施していた飼い主が同行避難した割合は、避難訓練をしていなかった飼い主の倍近くに上った。(表1)つまり自分の足で歩いて実際に避難訓練をすることにより、話を聞いただけの場合より倍の人間の命と同行する動物の命が助かるということである。

現在はIT技術も進み、バーチャル空間でのシミュレーションはどこでも実施可能であるし、前述した森の中での生活訓練など実際に動いてみるのが何より大切なのである。

飼い主は自分とペットの防災を、小動物関係者はペットと飼い主の防災を、そして動物園や水族館関係者は収容動物と来館者の防災を、野生動物関係者は災害時のヒトと動物の安全をそれぞれ

考えるだろう。しかしそれぞれがバラバラであるより、お互いを結びつけることで個々ではできなかったことがいとも簡単に解決するかもしれない。レベッカ・ジョンソンさんが言うように「全員の協力によってワンヘルスという概念が達成される」である。

私も動物のこころを探ることによって、皆様のお力になればよいと思っている。

今回ご紹介した内容は本学会の趣旨とは違う分野かもしれないが、災害は人間やペットはもちろん、動物園・水族館、そして野生動物においても平等に降り注ぎ甚大な被害を及ぼす。私の小動物分野での経験が、少しでも皆様のお役に立てれば幸いである。

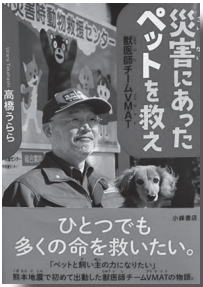
引用文献

1. 一般社団法人 ペットフード協会. 2020年(令和2年)全国犬猫飼育実態調査.
2. 中谷内一也. 2008. 安全。でも、安心できない…一信頼をめぐる心理学(ちくま新書), 160-164, 筑摩書房, 東京.

参考文献

1. 船津敏弘. 2022. 6愛護・適正飼養学. 動物看護コアテキスト第3版, ファームプレス, 東京.
2. 高橋うらら. 2019. 災害にあったペットを救え, 小峰書店, 東京.
3. 船津敏弘. 2019. 令和時代の動物防災: 福岡VMATの結成と活動を通して考える. 山口獣医学雑誌(46), 1-8.
4. 船津敏弘. 2017. 災害時における動物救護体制の再構築の必要性～熊本地震における福岡VMATの活動を通して～. 全国公衆衛生獣医師協議会 10-14.

書籍紹介



『災害にあったペットを救え 獣医師チーム VMAT』

高橋うらら 著

2019年3月
小峰書店 発行
159頁
定価 1,650円 (本体 1,500円+税)

目次

- 第1章 東日本大震災
- 第2章 被災した動物たち
- 第3章 動物たちを助けて！
- 第4章 VMATを作ろう！
- 第5章 熊本地震発生
- 第6章 VMAT 出動！
- 第7章 VMATのこれから

外平友佳理 (SALU 外平動物総合事務所)

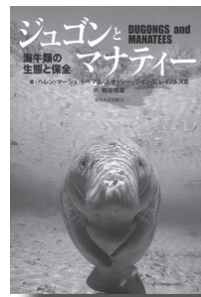
気候変動の異常により今や豪雨災害は隣合わせ、ますます地震の多発する日本では災害対策は喫緊の課題である。一方、国内のイヌとネコの飼育頭数は2千万頭を超え3人に1人は何らかのペットを飼っているという(本書「はじめに」より引用)。災害が起こった際にペットも安全に避難し健康であり続ける保証が本当にあるだろうか。この本は今回のニュースレター内の「ワンヘルスコーナー」で執筆された船津敏弘氏を中心にVMAT(災害時派遣獣医療チーム)について取材を重ねたものである。著者は命の大切さをテーマにノンフィクション作品を多く手掛ける作家で、東日本大震災の際に被災した動物たちを救うため活動する獣医師やボランティアの姿に感銘を受けたことがきっかけで(船津氏談)、すべて実録のエピソードである。

第1章目、東日本大震災時に本来は命を救うはずの獣医師が20頭もの入院動物をすべて置き去りにしなければならなかったエピソードは胸に詰まる。2章の被災した動物たちでは、家族であるペットを失った人の悲しみや、自身も被災しながらも避難所の隣に動物シェルターを設営した獣医師の話だ。待望のシェルターのはずだったがあまりの頭数に過密となり衛生状態が悪化、感染症が蔓延する。3章は警戒区域に置き去りにされた動物たちを助けるために奔走した獣医師やボランティアの話だ。人間不信となり怯えるネコに優しく粘り強く接して捕獲する様はみごとである。そして前述のシェルターを訪ねた船津氏は医薬品の供給も

ままならない状況に愕然とし、自分に何ができるか問い続けた結果「災害時には、動物たちを助けるためにすぐに動ける専門的なチームが必要だ。」とひらめく。

4章からはいよいよVMAT誕生秘話と5章は結成直後に起きた熊本地震の様子、そして6章でついにその熊本へ出動した話である。実際の被災地での様子や活動について写真とともに詳しく記されている。4~6章こそがこの本のメインとなっているのでこれ以上はぜひ読んでのお楽しみに。

最後に飼い主の備えとして、わかりやすいイラストと共にペットのために準備しておきたいものが記されており、保存版ともなっている。また全体を通して漢字にはすべてルビがふってあり小学生以上を対象にしているため非常にわかりやすく読みやすい仕様となっている。つまり、災害の世紀となってしまった今、まさに「一家に一冊」の本としておすすめしたい。



『ジュゴンとマナティー海牛類の 生態と保全』

ヘレン・マーシュほか 著・粕谷俊雄 訳

2021年9月
東京大学出版会 発行
528頁
定価 12,980円 (本体 11,800円+税)

浅川満彦

(酪農学園大学 獣医学群 獣医学類 感染・病理学分野
医動物学ユニット / 野生動物医学センター WAMC)

もし、高い!と感じた方が、それなりの英語読解力と海産哺乳類の基礎知識を既に具有されている場合、4,000円以上安価な Marsh et al. (2011) の電子版を購入するだろうか(もう少し高いがペーパーバックもある)。しかし、こちらは単なる訳本ではない。沖縄のジュゴンの現状について、新たな章(第10章)が設けられ、啓発と警告をしている。隣国の急速な軍事大国化に伴い、この動物が生息する海域は、キナ臭い。畢竟、新たな米軍基地設置にだれれ込まれ、ジュゴンはじめ貴重な生物が悲惨な状況にあることは、既に我々は報道で知っている。これを読み込むだけでも本書を手にする価値がある。なお、この章では、なかなか目にするできない最新の「沖縄防衛局」のアセス報告書なども多数引用しており、資料性も高い。

この日本版で追加された章を除く、原書本文を構成する9つ

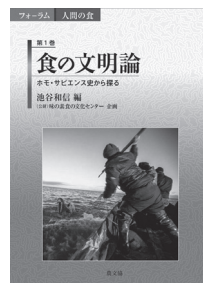
の章を通じ、絶滅種含む海牛類の生物学的な基本情報と保全施策の試みが詰め込まれている。10年前に刊行されてはいるが、色褪せてはいない（そもそも、研究者が少ないのでそれなりの進捗度合いを反映しているに過ぎないのだろう）。

もちろん、本学会員が最も関心が高いとされる疾病（と病原体）についても、保全上の脅威の章に記され（項目名称は「感染症と大型寄生物」、「化学汚染」および「有害な赤潮と生体毒素」）、参考になる。この章が凄いのは、疾病のみならず、コラムに相当する box でこのような因子がどの程度、現生海牛類（亜種ごとに脅威レベルをマイナス・プラス・ツープラスの3段階に分け示していることであった（注：他に情報欠如あるいは不明確な場合は「不明」、不明でも懸念が大きい場合、「？」）。もちろん、これらは「えいやっ！」と山勘で決めたものではなく、引用文献を根拠として明示されている。引用文献表は巻末に54頁に及ぶ膨大なものであった（モノグラフなので当然）。また、原書刊行年を反映していることからその表で記載されていたのは、1980年代から2000年代の論文・著作が大半を占めている。また、website 情報も補足情報として提示されていたが、これは、原書のいくつかの章で添付された附録 appendix である。この中には原書刊行時にアップデートされた寄生蠕虫類（本書では大型寄生物の中に含まれた）の一覧表もあり、浅川的には非常に助かった。

他に基礎獣医学的な情報としては食性や繁殖に関わる生理学・生化学、生態・進化に関わる形態（遺伝学・解剖学）が、また、応用獣医学的な側面では行動や齢査定、そして個体群動態などが記されている。残念ながら臨床獣医学の内容は、前述した感染症の診断などを除き、関連記述はほぼ欠くものの、本書が海牛類の野生動物医学として他に類の無いニッチを占めるのは間違いない。

引用文献

Marsh H, O'Shea TJ, Reynolds JE. 2011. *Ecology and Conservation of the Sirenia: Dugongs and Manatees*, 542 pp, Cambridge University Press, UK.



『食の文明論 ホモ・サピエンス史から探る』

池谷和信 編

2021年3月
農文協 発行
452頁
定価 5,940円（本体 5,400円＋税）

徳宮和音・浅川満彦（酪農学園大学 獣医学群）

本稿作成の2021年12月、COVID-19の影響で牛乳・乳製品の急減な消費落ち込みで、原乳を大量に廃棄する事態が生じつつある。この産業に直結する大学人として何ともつらい。生産調整や抗生物質混入事故などで原乳廃棄は珍しくは無いが、今回の規模は比較にならない程大きい。食資源廃棄自体、道徳的に抵抗感があるのは当然だが、野生動物医学に関わるものは別の面で許容できないだろう。

まず、家畜餌資源の約75%は国外産で構成されている。したがって、日本の畜産業はほぼ加工業とみなせ、最近、話題になる食料自給やSDGsとは関係しない。獣医学に軸足を置きつつワンヘルスを目指す野生動物医学の教員・学生諸君は、この認識が必要である。次いで、もっとスケールが小さくなるが、輸入餌には多量の草（乾草）も含む。牧草地は草原性鳥類が誤って造巢するので、その収穫では多くの野鳥が犠牲になる。さらに、輸入餌を、あるいは乳製品を、運ぶ船舶は、時折、重油を漏らし、それが海面を漂い、魚類集簇と間違え海鳥が飛び込む。低体温症と沈溺で死ぬ。我々（浅川と徳宮）が運営する酪農学園大学野生動物医学センターに運ばれる加工農家による犠牲者（死体）を通じ（浅川2021ab）、日本の食資源の状況に、日々、悶々としている。そのようなことが背景となり、本書を手にした。詳しい紹介は、以下、徳宮に譲る。（文責 浅川）

この本は人類がたどってきた食文化を分析しながら、グローバル化にともなって急速に変わりゆく現在の食文化の行く末を論考していた。構成は食資源の開発史、食の技術と食事空間、食と社会のかかわり方という三つの観点から論じられており、12の章に区分されていた。どの章も図や表、写真が豊富で非常に読みやすく、最終章まで興味を持って楽しめた。

特に、興味深く感じたのは「拡大する人類集団の肉食」の章であった。私（徳宮）は獣医学生として、肉牛農家における大規模化や交配による肉牛種の多様化、飼養形態の変化、大規模化にと

もなう疾病の管理など様々なことを学んできたが、いずれも現在においての仕上がった形として学んでおり、なぜこのような飼養形態になったのか、どういったプロセスで肉質の改善が行われてきたのかなどといった歴史的・食文化的観点から考えることはあまりなかったため非常に刺激を受けた。読み進めると、食と獣医学は密接に関連していることを強く感じた。肉食の促進化に伴う動物倫理や、飼育方法、去勢や搾乳など食を豊かにする技術、乳のDNA解析や成分調節など獣医学生であれば聞いたことがある話が多く、獣医師が食卓に深く関わっているということについての認識が深まった。

合間に挿入されているコラムもとても面白い。たとえば、セイウチの内臓を生で食べたこと、昆虫のおいしい食べ方についてなど。脂がのったマグロのトロのような生の骨髄、腹腔内に溜まった血を集めて煮込んだスープなど興味を惹かれる世界の食の一面を垣間見ることができた。他にも、インスタント食品の項目については、その歴史的な観点や発酵などの観点から丁寧に紐解いており、一人暮らしを始め、この食品に頼ることが多くなったことから親近感を抱きつつ楽しく読んだ。

また、本書は生物多様性の視点から人類は何を食べてきたのかについても丁寧にまとめられていた。人類が口に入れてきたものは究極的に言えば、水と塩、そして生き物である。人が食べる生き物について「野生生物」と「栽培植物と家畜」という見出しに大別されてそれぞれ紹介されていた。原核生物、植物(藻類含む)、菌類、爬虫類、両生類、昆虫類、クモ類、魚類、甲殻類、軟体動物、鳥類、哺乳類などあらゆる「生き物」であったことに、あらためて気づかされた。

よく「最初に食べた人はすごい」と語られる食べ物があり、菌類が発酵させたヨーグルトや納豆、ナマコ、ウニなどは話題に上るだろう。そういった食べ物が食べられるようになった背景も、本書を元に考えてみる事ができた。つまり、人間の好奇心や観察力によるもの、飢餓などさまざまなルーツが考えられ、普段何気なく口にしてる食べ物について以前より深く考えるようになった。

そして、野生生物は長いホモ・サピエンス史を通じての食の基礎であり、生物多様性と食の文化多様性は分かち難くつながっているという内容から、私(徳宮)の所属するゼミの教授(浅川)がよく話されている「救護と保護とは違う」という話も人類の食を考えることにつながると思い至った。救護は愛護精神に基づき動物に獣医療行為を行うことを指し、保護・保全は「野生動物は資源である」と考え、生態系のバランスを保つことを指す。救護

だけでは野生動物、ひいては食の多様性を守り切れないのである。世界の人口は増えていく一方であり、その人口を支えるだけの食料生産が課題となるなか、積極的に保護管理を行い生物多様性、そして地球環境を守っていかねばならない(以上、三浦2008)。

私(徳宮)は、前述したゼミの事情から、生き物と関わる機会、生き物について考える機会がほぼ毎日のようにある。生き物が食の基盤となっているという事実を見つめなおし、生き物に感謝し、共に生きるために私ができることをこれからよく考えていきたい。(文責 徳宮)

その彼女(徳宮)であるが、高度に変性した(要するに、塩辛のように腐った、あるいはスルメのように乾燥した)犠牲者の法獣医学を指向している。正直、野生動物の寄生虫あるいは寄生虫病学を専門とする指導教員(浅川)としては戸惑っている。「(研究材料の)野生動物の死体が欲しい?死因解析をしたらあげるよ」という取引で踏み込んだ「野生動物の法獣医学」(浅川2021b)を目指されてもなあ…。あくまでも方便だったし、それを目的に来られてもなあ…。でも、彼女の書く文章には、それなりの覚悟が認められるので、応援したい。

ところで、冒頭の牛乳消費キャンペーンの私(浅川)による「応援」だが、40代頃に乳糖不耐性となったので、戦力外。この不耐性の進化的な説明としては、乳製品は非常に美味しい。一方、養分としても重要。したがって、成長しきった大人が飲まないように(子供にいきわたるように)、生じた性質という説を知ったのも本書であった(82-83頁)。(文責 浅川)

引用文献

- 浅川満彦. 2021a. 野生動物医学への挑戦-寄生虫・感染症・ワンヘルス, 196pp, 東京大学出版会, 東京.
- 浅川満彦. 2021b. 野生動物の法獣医学-もの言わぬ死体の叫び, 256pp, 地人書館, 東京.
- 三浦慎悟. 2008. ワイルドライフ・マネジメント入門-野生動物とどう向き合うか, 134pp, 岩波書店, 東京.



『SDGsな野生動物のマネジメント 狩猟と鳥獣法の大転換』

羽澄俊裕 著

2022年2月
地人書館 発行
237頁
定価 3,520円 (本体 3,200円+税)

浅川満彦 (酪農学園大学 獣医学群 獣医学類 感染・病理学分野
医動物学ユニット / 野生動物医学センター WAMC)

野生動物医学会の刊行物を丹念にお読みの学生の皆さんに対しては何も心配していないが、入学したばかりの獣医大生のほとんどが救護を保護と同一視している。いや、保護の概念すら持ち合わせていないかも…。言うまでもなく、前者は愛護精神に基づく傷病個体の救命やケアを、一方、後者は個体群・メタ個体群から種・その生息環境までをまもることを意味する。その理解は、学業のスタートラインに立ったばかりの新入生にとって、人生を規定するモノゴトに関わる場合もある。したがって、本心を吐露するならば、大学入学前に理解し、適切な学部学科を選択し、間違えて獣医学科に來ないで欲しいのだが (以上、浅川, 2021a)。

その点で、本書は見事にその役を果たしている。もし、「野生動物の保護をしたい!」という意志がある程度強固ならば、中高生でも十分読みこなせる。この著者は日本における保護実践の先駆的機関「株式会社 野生動物保護管理事務所 WMO」を創設(1983年)したレジェンドである。ところで、社名にも冠した保護に関しては、本書149頁で興味深い論考が展開されている。著者によると、保全との使い分けは“好み”であり、また、“保護管理”は概念不明瞭という。ここまで自虐的に來られると「コアカリ野生動物学の教育上、忌々しき大問題!」という正論は引っ込み、むしろ清々しい気にさせる。しかし、獣医学初学者にとっては、混乱に拍車をかけること必至。なにしろ、彼らの眼前には三つ巴状態となった保護・保全・救護が存するのだから。

さて、既に何度も出てきた救護だが、本書では出ていない。そればかりか、獣医学や獣医療という語も無い。唯一、ガバメント・ハンターに規定される資格の峻厳さの比喻として“獣医師免許”が出てきただけだ(175頁)。このことは、(著者は無意識だったろうが)野生動物の保護管理(本書では“環境マネジメント”)において、獣医学はほぼ関わりなしというメッセージだろう。

話が前後したが、本書は二つの部に分かれ、最初は動物臭い各論的・列挙的な内容である。まず、日本における野生哺乳類(一部、

ウ類や猛禽類などの鳥類)相の生物地理学的概観に始まり(!)、狩猟と不殺生の思想の歴史の変遷の解説に驚かされ、カモシカ、ニホンジカ、イノシシ、ニホンザル、2種クマ類の記述であった。本書キャパから、詳述するには限界があるので、それぞれの種に関し、日本語の優れた書籍に引き継いでいる。そう、本書は書籍ガイドブックの機能も併せ持つ。初学者は、まず、そこに挙げられた書物を逐一読まないといけな

い。後の部は、鳥獣保護管理法を中心にした動物法の現状と問題点の論考である。このパートを通読した途端、頭を殴られた気がした。奇しくも、本書と同時に(それも同じ出版社から)、評者は法獣医学の書を上梓し(浅川, 2021b)、この本の第6章で動物法を概観した。しかし、この本と比較し、あまりにも浅薄な代物と悟り、血の気を失ったのだ。そもそも、拙著冒頭で示した“無主物”という語すら、フワっとした形で使っていた。これも、こちらの本では法学的な説明がなされた。一事が万事、野生動物の法に関し、これほど優れた論考は、他書ではお目にかかれな

いと思う。一点気になるのが第1次産業。要するに過疎地域の活性化が期待される産業としての文脈で何度か語られていたが、背景となる人口減だからこそ、加工業(第2次産業)に近いという理解は必要だろう。まず、日本の畜産業では、家畜に与える餌資源は約75%が国外からの輸入に依存している。また、スマート農業という語の裏には(直接的労力軽減のため)、作業の多くが石油資源に依拠していることを示すのだ。攻めの農業で国外から注目されるのは、農家さんたちの細やかで丁寧な仕事に対してである。だが、食糧(あるいは食料)自給という文脈では語ることは不可能で、SDGsですらないことは指摘しておこう。

引用文献

浅川満彦. 2021a. 野生動物の法獣医学-もの言わぬ死体の叫び, 地人書館, 254pp, 東京.

浅川満彦. 2021b. 野生動物医学への挑戦-寄生虫・感染症・ワンヘルス, 196pp, 東京大学出版会, 東京.

賛助会員（順不同）



株式会社イーグレット・オフィス



文永堂出版株式会社

◆ 編集後記 ◆

新型コロナウイルス感染症が拡大し、多くの方が外出を自粛される中で、動物園の職員として自分にできることは何かを考えた時期がありました。実際に五感を使って動物とふれあうことは、個人的にとっても大切な機会だと考えています。そこで実体験に代わる何かを探すために、様々なことを試みました。例えば、遠足に代わる「リモート動物園」や教材動画「DoubTube（どうぶちゅーぶ）」の作成などです。SNSではTwitterを新設し、園内動物の姿をより多くの方に見てもらえるようになりました。このような取り組みを行うと、こちら側も元気をいただき、新たな発見がたくさん出てきました。大きな問題が生じたとしても、様々な角度から柔軟に対応し、前に進んでいきたいです。 C.H

本誌に掲載された内容の一部あるいは全部を無断で複製（コピー）、転載することを禁止します。

Zoo and Wildlife News

No.54 2022年6月

発行 日本野生動物医学会

〒060-0818 札幌市北区北18条西9丁目
北海道大学大学院獣医学研究院
臨床獣医科学分野 繁殖学教室内
Tel・Fax 011-706-5234
E-mail wildmed@vetmed.hokudai.ac.jp

振替 00890-3-76589

編集委員長 外平友佳理

副編集委員長 井上春奈

編集委員 伊藤圭子

田中悠介

後藤拓弥

土井寛大

橋本千尋

制作 文永堂出版株式会社